ヴェーユと実存主義者たち⑦

村　上　吉　男

これは前号に続く拙論である。[1]

筆者は前号で、サルトルがいう〈感覚（sensation）〉に関した二引用文を取り出してみた。そこでは、〈精神は精神自身の諸感覚を産出しない〉が、〈精神は諸感覚とは別のままでいながら、精神自身の諸感覚である〉ばかりか、〈感覚（という観念）はたんに作られる（ものである）〉と語られていた。ここからは以下のことが問える。まず、彼が〈精神は精神自身の諸感覚を産出しない〉と述べるならば、どこが〈産出〉するとみることができようかである。〈わたしたち〉は不断、〈諸感覚〉が五官（感）や内臓諸器官なる〈身体〉から〈産出〉され、彼にいう〈意識〉を含めた〈精神（esprit）〉に伝えられることを知っている。にもかかわらず、彼にいわせる〈身体〉は疾うに触れた通り、たとえば〈意識〉の一に〈即自（存在）〉を配置させ得るごとき〈即自でない〉のであった。〈身体〉が〈即自でない〉と断じられることは彼のめざす哲学にあって、〈身体（諸器官）〉を、かつそれらに発する〈諸感覚〉を、ましてや例の〈心身（身心）合一〉のことをば論外にせざるを得ないことを示唆させた。いや筆者にとって、彼は〈諸感覚〉や〈心身合一〉のことを「論外」とみなすよりか、〈諸感覚〉の〈身体〉と〈精神〉への各〈受容〉を、あわせて〈諸感覚〉の〈身体〉から〈精神〉への伝達を否定（拒否）するかのように捉えられるのだ。だからかデカルトにいう〈心身合一（l' union de l' âme avec le corps）〉を引き合いに出しては、この〈心（l' âme）身（le corps）〉を〈合一〉させる能力を〈感覚（デカルトにいう〈sens〉や〈sentiment（passion）〉またサルトルにいう〈sensation〉）〉にではなく、〈想像に（dans l' imagination）〉[2] 求めていたわけである。（デカルトにいう〈真理の探求〉の用法の〈l' esprit（精神）〉には、この〈感覚〉や〈想像〉による各〈認識〉作用が否定されているからして、〈心身合一〉も認められなかったが、他方筆者にいう「日常的用法」の〈âme（魂）（精神）〉に各別能力たる〈感覚〉や〈想像〉が配備されると語られる以上、各能力の〈認識〉作用が肯定されるばかりか、〈感覚〉のほか、サルトルに指摘されたごとく、〈想像〉による〈心身合一〉が認められるといえるやもしれぬ。）

そこで次に、サルトル自身は〈想像〉をどのようにみていたかを質しおかねばなるまい。たとえば、筆者がデカルトに読む「日常的用法」における〈身体〉や〈l'âme（魂）（精神）〉はそれぞれ〈感覚〉や〈想像〉を〈産出〉するといわせるに対し、サルトルが 1940 年に《L' imaginaire（想像の領域）》を上梓しては、筆者が参考にした《L' être et le néant（存在と無）》（1943 年）以前に、すでに〈想像（なるもの）〉を論じていたと推測できることに立つと、彼にいう〈身体〉や〈l' esprit（精神）〉での各〈感覚〉への見方と同様に、〈想像〉はそのいずれでも〈産出〉されないにちがいないと判断される。それはもとより、サルトルにみる〈感覚〉をはじめ、この〈想像〉も、〈身体〉は〈即自でない〉がゆえに、また〈精神自身の〉各能力にすらみなされないがゆえに、かかる〈身体〉や〈精神〉での各〈産出〉

を不可能にさせられるといわねばならぬことにあるからである。これ以外のことを想定することは、要は一方の〈感覚〉が存在することを否定（拒否）して、他方の〈想像〉が存在することを肯定したり、この逆に〈想像〉の存在を否定（拒否）して、〈感覚〉の存在を肯定したりすることは、上記と同じにみられよう〈身体〉や〈精神〉にあっても、〈感覚〉や〈想像〉が等しく扱われない矛盾を生じさせかねないばかりか、両方の能力の存在が肯定されたり、否定（拒否）されたりするとて、〈感覚〉や〈想像〉を各〈産出〉させないことには変わりがないのだから、各能力をして〈身体（の神経）〉から〈精神（の神経）〉へと求心的に関係せしめるところでいわれる〈心身合一〉はサルトルに認められることがないし、それなのに、サルトルがあえてデカルトにいう〈心身合一〉のことを持ち出すとともに、繰返し指摘しておくが、〈心身〉を〈合一〉させる能力を自らの主張からか、〈感覚〉にではなく、〈想像〉にみるように言及したことは、筆者が上記で述べたのとは異なる特徴を〈想像〉に与えていたかどうか分からねども、少なくもサルトルはデカルトにいう〈心身合一〉での〈感覚〉をほとんど語らずして、サルトル自身の見解だけに立つ批評（批判）であったことを否めなくさせた。だから〈感覚〉や〈想像〉の両方を考究するならまだしも、それなしには何をいってもはじまらない、あるいは〈心身合一〉を語ったり、デカルトに比較させたりする資格さえないと筆者にいわせ得る（同様にサルトルのデカルト哲学に対する批評（批判）は、例の《コギト（cogito）》にあったことを確認しておく）。

しかして〈感覚〉と記された引用文に従うと、サルトルは〈精神は諸感覚とは別のままでいながら、精神自身の諸感覚である〉という。そこでこの引用文で語られることは何かである。一に、〈精神は諸感覚とは別のままでいながら〉という語句では、〈精神は精神自身の諸感覚を産出しない〉こともあって、〈精神〉すなわち〈諸感覚〉にみられないことが、一に、〈精神は…精神自身の諸感覚である〉という文章では、〈諸感覚〉は〈精神〉で〈産出〉されないが、〈精神自身の〉諸能力に見立てられることが含意される（筆者はこうした〈諸感覚〉と同様に扱われるのが〈想像〉であるとも読む。かつ〈感覚〉や〈想像〉が「各別能力」であると筆者に書かせたは、〈想像〉が〈感覚〉のように、外的〈世界〉での何らかの対象の〈身体〉や〈魂（精神）〉への各伝わりが可能になるだけでなくて、生理的に生じ伝達されるとみなしたデカルトの主張にサルトルも同意したし、サルトルはこれ以外に、何らかの特徴を〈想像〉に見出していた（であろうか）と捉えられることによる）。外的〈世界〉のことは後述に回すにせよ、それでもサルトルにあって、〈感覚〉や〈想像〉が〈精神自身の〉諸能力となることは何か。筆者はその「何か」には〈感覚（という観念）（あるいは〈想像（という観念）〉）はたんに作られる（ものである）〉とされた文章を当てはめてみるしかなくなるのだ。つまり引用語句のみを取り出す〈感覚（という観念）〉を生み出すはかの〈意識〉であり、〈感覚〉や〈想像〉は〈精神〉ではなく、〈意識〉で〈作られる〉からして、〈精神は諸感覚（または想像）とは別のままでい〉られるともいい得る。〈感覚（という観念）〉なる表記中の〈観念〉は〈作られる〉当の作用に与する。この〈観念〉はすでに一見した通り、〈意識〉を構成する主力能力〈理性（知性）〉以外では〈作られ〉ないのであった。したがってここで筆者に推察され得ることは、およそ〈作られ〉た〈感覚〉や〈想像〉がこの〈意識〉から〈精神〉に、その〈精神（精神自身の感覚や想像）〉から〈身体〉に遠心的に伝達されるであろうが、しかし〈身体〉は〈即自（現存在）でない〉ために、〈身体〉に伝わりようがなくなる、要は遠心的な関係での〈心身合一〉すらサルトルに見

当たらなくするし、〈意識〉にあっては、〈感覚〉や〈想像〉を〈精神〉に伝えた（放出した）のだから、すでに各能力が〈意識〉にみられることはなくなるほか、〈精神〉に居残るだけになるといわねばならぬことにある。そこに繰返し述べおくことが課せられる。それは、例の〈意識〉の一たる〈即自存在〉に、〈理性（知性）〉と同等に、〈感覚〉や〈想像〉が既存の諸能力として配属（配置）されてあるというのではない、つまり〈感覚〉や〈想像〉は〈理性（知性）〉によって、その都度各新たな〈観念〉として〈作られる〉能力にすぎず、かかる〈即自存在〉には〈理性（知性）〉よりほかの能力がないと見て取れるからである。そのことは、要は〈感覚（という観念）〉が〈精神〉でなしに、〈意識〉で可能なのは何ゆえとみることができるのか、次の引用文に聞かねばなるまい。

> Je conçois, pour soutenir la sensation et pour lui fournir de l'être, un milieu homogène à elle et constitué lui aussi en extériorité. Ce milieu, je le nomme esprit ou parfois même conscience.[3]

> わたし（サルトル）は、感覚を弁護するために、また感覚に存在を与えるために、感覚と等質（的）であり、感覚と同様に外在性（外的〈世界〉）から成って構成されるひとつの場を思い描く。こうした場を、わたし（サルトル）は精神と名付けたり、ときには意識とも名付けたりする。（括弧内は筆者）

上記引用文を筆者なりに理解するうえで（以下ではこの引用文に従い〈感覚〉だけを取り上げおく）、〈感覚〉が〈精神〉（ならびに〈わたし〉）によって〈産出〉される関係をもつのでなしに、〈意識〉の一たる〈即自存在（現存在）〉の〈理性（知性）〉によって〈作られる〉関係を有し、そこから引用文にいう〈場〉なる〈精神〉に伝えられる関係にさえあると繰返しつつ、筆者はまず、〈感覚〉のかかる〈場〉への伝達はこの〈場〉での〈感覚に存在を与えるために〉と記されたことで証され得ることを、したがって〈感覚〉をして〈意識〉（の一たる〈即自存在（現存在）〉）に〈存在〉せしめるのでないことを、まして〈身体〉に〈存在〉させるのでない、要は〈身体〉にかかわらせないことを意味させずにいないといわなければならない。だから〈身体〉に発するといわれる〈感覚〉にもかかわらず、サルトルにみる〈感覚〉がその〈身体〉によって生み出されるのではなく、しかも〈身体〉自体が外的〈世界〉と関係しないことは〈身体は…世界の諸対象に、すなわちわたしが認識したり、利用したりする諸対象に属しているのではない〉と記された前記引用文において、また〈精神〉については、〈精神（場）〉は〈感覚〉が〈外在性（外的〈世界〉から成〉ると書かれた上記引用文（ここから〈精神（場）〉は〈感覚〉を通して外的〈世界〉と関係することになる）において、さらに〈意識〉については、〈感覚（という観念）は意識と世界との関係に関する、確かな理論からは決然と締め出されなければならない〉と述べられた前記引用文（ここから〈意識〉は外的〈世界〉と関係しないことになる）において、そして〈わたし〉については、〈わたしのために、世界があらわれるようになる〉と語られた前記引用文（ここから〈わたし〉は外的〈世界〉と関係するがごときにみえる）において、確かめられることであるし、〈わたし〉を除いては、結語とみなすことができる。かつ筆者はここで以上に関したことをば、上記引用文中の〈場〉が〈ひとつの場〉と表記

されたことに言及しながら、次のようにまとめおくことができる。〈場〉が〈精神と…ときには意識とも名付け〉られることにより、筆者には〈即自存在（現存在）〉や〈対自存在（本来的存在）〉であったりするという〈意識〉がいわば「脳」全体を代表するとみなし得るならば（「脳」全体を〈精神〉と捉えてはならない）、〈意識（脳）〉全体はそのなかに、〈ひとつの場〉である〈精神〉（と呼ばれる部位）が、また例の「もうひとつの」という表現を用いては、「もうひとつの」〈場〉であろう、〈他者〉とされる〈わたし〉（と呼ばれる部位）が含まれて〈構成される〉にちがいなかろうといわせ得るのだ。〈精神〉は〈意識〉のなかの〈ひとつの場（部位）〉とみられるからして、この〈場（部位）〉を〈ときには意識とも名付けたりする〉と語らせたことは当然であり、それこそ〈ときには〉筆者が〈意識〉の語に括弧を付して〈精神〉と書き込みをしたことはあながち間違ってはいなかったにしても、またこの〈精神〉について記したことは以上に指摘した通りであるにしても、たとえば上記引用文で〈わたし〉と訳した箇所を何ゆえサルトル名で括り表記し得たのかに答えなくてはなるまい。〈意識〉に織り込まれたといえる〈わたし〉は彼の哲学に語られる〈わたし〉である。すでに何度か触れた通り、〈わたし〉は〈他者〉ともみられたがゆえに、〈意識〉それ自身を示すのではないと、換言すると〈意識〉がすなわち〈わたし〉であるならば、例の〈この対自とこの世界との統合〉なる語句表現を〈意識とわたしとの統合〉にいい換えたとて、〈統合〉の一方の〈わたし〉を〈意識〉にあえて相対させずとも済ませられ得ると、それでいて〈わたし〉がその他方の〈意識〉とどう〈統合〉するかは、〈わたし〉が〈意識〉としての〈対自存在〉や〈即自存在〉に各「付け足しにされた」関係にあって、その成立をみるほかなかったと読むことができたのだ。〈わたし〉がこうした関係で、なかでも〈対自存在〉との関係でいかに〈統合〉されるかをここでは繰返さないが、かかる哲学上での〈わたし〉以外に、〈わたし〉にはたとえば、上記引用文中で〈わたしは精神と名付けたり〉と記された〈わたし〉や前記引用文中で〈わたしが認識したり、利用したりする〉と表記された〈わたし〉などが見受けられるために、筆者は彼が〈わたし〉と書き込むすべてのうちの、いくつかの〈わたし〉を哲学上の〈わたし〉と別扱いし、上記引用文にはじめて括弧したように、サルトルのことをさすと捉えおかねばならなくなったわけである。わけでも〈わたしが認識したり〉という、この〈認識する〉にあって、筆者はこれが〈意識〉としての〈即自存在〉によって可能になると主張したに反し、哲学でいう〈わたし〉が、しかも〈他者〉といわれる〈わたし〉が〈認識する〉とみなされるならば、彼は〈即自存在〉という観念用語を持ち出す必要すらおよそなかろうし、また〈わたしのために、世界があらわれるようになる〉、その〈わたし〉がもしや彼本人を兼用させてもいるとみられるならば、〈わたし〉は何と紛らわしく映じてくる以外の何ものでもなくなるであろう。要するに、彼は哲学上に述べる〈わたし〉と彼本人を語る〈わたし〉とを区別して書くべきであったということである。

筆者は前段までにみた〈意識〉〈精神〉〈わたし〉〈感覚〉や（外的）〈世界〉のそれぞれについて結語すべく、さらに取り上げ、ときにこれらに、例の観念用語を関連させながら、次のようにまとめたり、筆者なりに批評したりすることを試みる。一に、〈意識（即自存在）〉において、筆者は〈感覚〉が、ならびに〈感覚〉からも生じるとされる感情（後述する〈嘔吐〉や〈不安〉）が〈意識（対自存在）〉や〈わたし〉でではなく、〈意識（即自存在）〉で作用しよう〈理性（知性）〉により〈観念〉として〈作られる〉と知り得たし、そのうえ

彼がこの〈作られる〉能力を〈精神自身の諸感覚〉と強調しているのであれば、〈作られる〉能力は〈意識（即自存在）〉にとどまらず、そこから〈精神〉へと伝達されたにちがいなかろうと読むことができた。にもかかわらず、サルトルに〈感覚に存在を与えるために、感覚と等質（的）であり、感覚と同様に外在性（外的〈世界〉）から成〉るのが〈精神〉だといわせたかぎり、〈精神〉はばかりか、その能力とされる〈感覚〉は〈外在性（外的〈世界〉）〉と関係せずにいないことが明らかになると受け取らねばならなくなる。だから〈外在性（外的〈世界〉）〉（の何らかの対象）は〈精神〉たる〈場〉にその〈感覚〉能力の作用を通して受容されるとみてかまわぬのであろうか。つまり筆者がここに多少の疑問を感じるは、以下やのちにさらなる検討が加えられるにしても、上記した〈感覚〉が一方で、すでに触れたように、〈意識（即自存在）〉にて〈作られる〉とし、他方で〈精神〉に「受容される」と捉え得るからであった。そこで筆者は五官（感）や内臓諸器官を通じて伝わる各感覚についてでなしに、一〈感覚〉（一〈感覚〉とは要するに身体にかかわるのではない〈感覚〉）に代表させて語るにしても、その一〈感覚〉が今みたように、彼に〈意識（即自存在）〉と〈精神〉とに関与するごとくにいわれるのであれば、一〈感覚〉はどう〈意識（即自存在）〉と〈精神〉に関係づけられると、はたまた関係づけられないとみなすことができるか質されねばならぬであろう。たとえば、〈外在性（外的〈世界〉）〉（の何らかの対象）を感覚なるものに仲介させ〈精神〉に受け入れてから、〈精神（自身）〉の感覚なるものが〈意識（即自存在）〉に伝達され、〈意識（即自存在）〉で改めて〈感覚〉として〈作られる〉関係にあるといわせるのであろうか（この「知る作用」（認識論）はしかし〈実在論〉になるほかない）。だがこのことは〈意識（即自存在）〉がそれ自身で〈感覚〉を〈作る〉ことになり、その〈感覚〉を〈精神〉に伝えると述べたことに反するではないか（〈作る〉とは既出引用文〈感覚（という観念）は…作られる〉にあって、〈作られる（être inventé(e)）〉と表記された「受動態（その過去分詞を動作を示す動詞とみる）」を「能動態」に置き換えた動詞（訳）であると、また〈意識（即自存在）〉での、〈思惟（認識）（観念）する〉能動能力の一たる〈作る〉とその〈思惟（認識）（観念）〉なる受動能力の一たる〈作られる〉能力の働きによって、受動能力〈感覚〉が生み出され、そのまま〈精神〉に伝えられると読んだわけである）。それとも今上記したように、〈意識（即自存在）〉がそれ自身に有する〈能動〉的作用の〈作る〉やその〈受動〉的作用の〈作られる〉で成るとみえよう〈感覚〉と、たまたま〈外在性（外的〈世界〉）〉から〈精神〉に「受容される」というほかなかろう〈感覚〉とが一致させられたとでも語らせるのであろうか（ここで明かされることは、〈外在性（外的〈世界〉）〉を写し取るごとき、〈精神〉に「受容される」〈感覚〉を、要は彼がこの〈精神は精神自身の（諸）感覚〉を〈産出しない〉と書いたのだから、〈精神〉には筆者にいう〈能動〉や〈受動〉の各能力の機能がないとみなければならぬし、これに加えて、〈精神〉が〈外在性（外的〈世界〉）から成〉ると記されたのだから、〈外在性（外的〈世界〉）〉は、一方の〈意識（即自存在）〉とはおよそ関係しなくなるということにある。だが以上から〈認識論〉を問おうとて、上記本文の例は〈意識（即自存在）〉における〈観念論〉と、〈外在性（外的〈世界〉）〉の〈精神〉へのかかわりでいえる、〈精神〉における〈実在論〉とが混在するとみられては、これらはいかなる〈認識論〉的思想と呼び得るか疑問に思われる）。

筆者が以上から推察するに、サルトルはこの混在し、相反する各〈認識論〉的思想を〈意

識〉や〈精神〉のおのおのに充当させるそれとしてそのまま認めるごとき使い分けを意図していたと。しかり。彼が「使い分け」を試みたといえるは、筆者が以下に語ることで証明されよう。一に、筆者が「脳」と置換できる、彼にいう〈意識〉はその全体のなかに〈精神〉と〈わたし〉なる各〈場〉（部位）を含ませて組み立てられていた。だからこの〈精神〉と〈わたし〉を除いた、残りの〈場〉が何より〈意識〉すなわち〈即自（存在）〉（現存在）とみなされるし、かつその〈意識（即自）（存在）〉を〈変化（変身）〉せしめては、〈意識〉すなわち〈対自（存在）〉（本来的存在）を生じさせ得たわけである。一に、この〈意識（即自）（存在）〉はそれ自身で〈思惟（認識）（観念）する〉〈能動〉能力とその〈思惟（認識）（観念）〉たる〈受動〉能力を有するとみることができた。要は〈意識（即自）（存在）〉は自らに見出し得る（外在性（外的〈世界〉）にかかわることのない）対象に、〈作る〉とその〈作られる〉関係を可能にさせた。したがって〈意識〉を〈観念〉用語なる〈即自（存在）〉や〈対自（存在）〉として命名し、各用法を〈思惟（認識）（観念）する〉も、この〈意識（即自）（存在）〉の働きであるということであった。そこで上記を踏まえて語るに、一に、彼が〈精神〉は〈精神自身の（諸）感覚〉でもって〈外在性（外的〈世界〉）〉に関係するといわせたかぎり、一方にいう〈意識（即自）（存在）〉が〈外在性（外的〈世界〉）〉に関係するとはもはやいえなくなる。だから〈意識（即自）（存在）〉が有する〈理性（知性）〉で、〈感覚〉は〈作られる〉ほか、〈精神〉に伝わる関係にあると指摘できる方が、〈外在性（外的〈世界〉）〉から〈精神〉に伝達されよう、〈感覚〉との関係よりも優先されねばならぬし、まして〈感覚〉がその〈精神〉から〈意識（即自）（存在）〉に伝えられる関係はないと断じてかまわぬことになる。すると果たして、同じ〈意識〉内での各〈場〉である〈精神（感覚）〉と〈意識（即自）（存在）〉には繋がり（関係）がみられるといい得るのか、関係があるならば、いかなる関係かを今一度確かめねばならぬであろう場合、筆者は一に、疾うに触れた通り、〈意識（即自）（存在）〉にて〈作られる〉〈感覚〉が〈存在〉すると彼にいわせるせいで、その〈感覚〉にかかわろう能力〈感情〉すなわち〈嘔吐〉や〈不安〉さえ〈作られる〉と想定し得たにあって、こうした〈感覚〉や〈感情〉が〈精神〉といわれる〈場〉に伝わり、〈精神自身の諸感覚（感情）〉として〈精神〉に織り込まれ、要は仕組まれるとみえたばかりか、一に、〈意識（即自）（存在）〉の〈精神〉への、〈諸感覚（感情）〉の伝達関係を可能にし、そこから例の〈この対自（意識）とこの世界（わたしと外的〈世界〉）との統合〉を現実にするうえで、ここに〈わたし〉を登場させる必要があると、つまり〈わたし〉が出番となる以外にないといわねばならなくなったのだ。なぜなら外的〈世界〉を写し取るとされ、〈精神〉に「受容される」と捉えられるのを含む〈諸感覚（感情）〉は、〈わたし〉すなわち〈投企〉などの仲介をして、〈諸感覚（感情）〉それ自身を、要はこの諸能力の帰する〈精神〉を〈意識（即自）（存在）〉に結びつかせられねばならなくなると読むことができるからである。しかし今上記したことで注意すべきは、〈わたし（投企など）〉がかかる〈精神〉から〈意識（即自）（存在）〉への仲介役を努めるとみても、〈精神自身の諸感覚（感情）〉が〈わたし（投企など）〉に直接「受容される」ことをさすのでもないし、さらに〈意識（即自）（存在）〉に、あまつさえ〈意識（対自）（存在）〉に関係させられることを示すのでもないということにある。

だが筆者が前段の最後に記した文章のように、〈精神（自身の諸感覚（感情））〉の〈わたし（投企など）〉と〈意識（即自や対自）（存在）〉への各関係に対し、否定的にみたは

何ゆえかを後述もするところであるが、ここに多少答えおかなくてはならなくなる。その際確認されるべきは一に、上記した〈精神〉〈わたし〉〈意識〉が同じ〈意識（脳）〉内に〈存在〉しながら、それぞれ異なる動きをする〈場〉であった（おのおのに括弧を付した語はそれらとしての作用とその役割を担わされて名付けられた）ということである。一に、〈現存在〉である〈意識（即自）（存在）〉はそれ自身に見出す、何らかの対象を、要は外的〈世界〉とかかわらない、何らかの対象を〈思惟（認識）（観念）する〉し、そのうえでたとえば、〈嘔吐〉や〈不安〉の〈諸感覚（感情）〉という、あるいは〈投企〉をはじめとする、〈参加〉〈行動〉〈選択〉という〈思惟（認識）（観念）〉を可能にさせる〈場（部位）〉を占めたことにある。かつ筆者は〈意識（即自）（存在）〉にて〈作られる〉、こうした諸〈観念〉のなかで、唯一かといえるほど、〈精神〉と呼ばれる〈場（部位）〉に伝わる、〈感覚（感情）〉たる〈観念〉が、一方でサルトルに、外的〈世界〉から〈精神〉に「受容される」、わけても〈感覚〉と同じに見立てられたり、それで〈精神〉の能力として扱われたりしては、まさに現実に生じるごとき〈感覚〉に変わりなく映るか、あるいは〈身体（諸（感覚）器官）〉を〈利用〉して成る、この実際の〈感覚〉能力に入れ換えられるか、見紛うことになると読むほかないだけか、そう答えおく以外になくなったのだ。彼に〈身体（諸（感覚）器官）〉が〈捕えどころがない〉と語らせたわけでなくとも、上記のことを明確にしなかった、その非は浅学の筆者にあり、彼にではない（それでも筆者があえていうに、〈感覚〉（ここも〈感覚〉だけが取り上げられる）たる〈観念〉は不思議といえども、現実の能力になると指摘おく）が、しかし〈身体（諸（感覚）器官）〉から〈精神〉に「受容される」ことでいわれよう、現実（実際）の〈感覚〉能力は、この〈身体（諸（感覚）器官）〉内での、不断の「行動（運動）」だけによるからして、筆者はこれを今居る場所から、〈身体（手足）〉全体を動かし移動させていう体験もしくは経験とみることができないと断りおく。なお〈精神〉の方は彼にあって、強いて繰返すと、外的〈世界〉を写し取る、現実の能力〈感覚〉とかかわる〈場〉といわれたのだから、これに合わせられるように、例の、〈意識（即自）（存在）〉の〈理性（知性）〉で〈作る〉〈作られる〉諸〈観念〉のうち、〈精神〉に伝わる〈感覚（感情）〉たる〈観念〉を、もはや〈観念〉としてではなく、外的〈世界〉に関係する、現実の〈感覚〉能力として〈存在〉させると受け取られなければならないし、こうした役割を担わせられることにあると察知される。換言すると〈精神〉は〈意識（即自）（存在）〉で〈作られ〉し〈感覚〉（ここも〈感覚〉だけが取り上げられる）たる〈観念〉が外的〈世界〉から〈精神〉に「受容される」、現実の〈感覚〉能力に重ねられるように、彼をして〈精神〉を、要はその〈感覚〉を構成せしめられているということである（そうみておかないと、〈感覚〉たる〈観念〉と現実の〈感覚〉能力にしよう、何らかの対象が〈意識（即自）（存在）〉や〈精神〉のそれぞれに同時に取り込み、取り込まれるにしても、同一の対象であるといわれなくなるし、また同じ対象からの同じ〈感覚〉が二つの〈場〉にそのまま各〈存在〉するとみなされるにあっては、これも不思議に終始するといわざるを得なくなるだけである）。

そこで筆者が思うに、外的〈世界〉から「受容される」と結語しておく〈精神自身の諸感覚〉は、さらにかかる〈諸感覚〉に括弧を付して表記した諸「感情」はこの〈精神〉に「受容され」た後にあって、いったいどうなるのであろうかである。これを一言にすれば、〈精神〉で〈精神自身の諸感覚〉が自ら機能して諸「感情」に展開されることはないだけか（〈諸感覚（感情）〉は当初〈意識（即自）（存在）〉でその諸〈観念〉として〈作られる〉し、そこか

ら〈意識〉内の一つの〈場（部位）〉である〈精神〉へ伝わると、また例の〈嘔吐〉や〈不安〉（の諸〈観念〉）は〈意識（即自）（存在）〉での、この〈諸感覚〉（の諸〈観念〉）から生じよう諸「感情」（の諸〈観念〉）であるとみた）、〈精神〉の〈諸感覚〉は〈意識〉内の、他の〈場（部位）〉に、要は〈意識（即自）（存在）〉や〈わたし〉に罷り間違っても関係させ（伝え）られることがないということである。一方の〈嘔吐〉や〈不安〉なる諸「感情」は、たとえ〈精神〉に伝わるとみえるにせよ、〈精神〉でも、〈意識（即自）（存在）〉にて〈作られる〉諸「感情」の諸〈観念〉にとどまるしかなくなろう。なぜなら〈精神〉が外的〈世界〉（の何らかの対象）から〈身体（諸（感覚）器官）〉で受け取りし、明白たる〈諸感覚〉ほどになるとみられるのでなしに、何らかの対象をばたまたま諸「感情」らしく写し出すような対象として受け入れたとて、〈精神〉はしかし、かかる諸「感情」らしき、「受容される」対象に対し、たとえば〈嘔吐〉や〈不安〉と命名し得る機能である〈理性（知性）〉能力を有してはいなかったからである。要は〈精神〉は外的〈世界〉からの諸「感情」らしき対象を〈諸感覚〉の例のように、諸「感情」として「受容」し得る〈場〉ではないことになる。だから〈嘔吐〉や〈不安〉という諸「感情」は〈意識（即自）（存在）〉だけにおいて、諸〈観念〉として〈作られる〉以外にないことがここで明かされたわけである。

すると〈精神〉にとって、〈諸感覚〉をはじめ、諸「感情」も〈意識（即自）〉から伝えられる関係にあるとみなされ得るのか。これを肯定することはさらに、〈意識〉全体にはこの〈精神〉の〈場〉のほか、〈即自〉や〈対自〉たる〈意識〉と〈わたし〉の各〈場〉がみられたのだから、とくに〈精神（自身の諸感覚）〉は〈意識（即自や対自）〉と〈わたし〉のそれぞれと、今度は〈精神（諸感覚）〉から〈意識（即自や対自）〉と〈わたし〉へと関係することがないかどうかを確かめることを課してくる。「今度は」以降に記した関係が窺われぬのならば、サルトルが〈意識〉内を三つの〈場〉に設定したは何のためであろうか。彼は三つの〈場〉がおのおの何らかの役割を分担しつつ、相互に関係させては、〈意識〉全体として機能させることをねらいにしていたと察知される。そうでなくては、〈諸感覚（感情）〉なる諸〈観念〉が真先きに〈意識（即自）〉で〈作られる〉ことはないばかりか、ここから〈精神〉に伝わると筆者にすでにいわせた関係も見当違いだと、または筆者の誤解だと指摘を受ける以外になくなろう。しかし筆者が察するに、各〈場〉は、他の〈場〉との関係を持ち合わせるほか、それなりの、各〈場〉の役割を有するとみることができる。たとえば筆者が最初に触れたような、〈意識（即自）〉から〈精神〉へという関係は、前者が〈諸感覚（感情）〉を後者に伝える〈能動〉の役割を、この前者の〈能動〉を後者の方からいうと、後者〈精神〉に伝えられる〈受動〉の役割を有し、それぞれに従ったうえでの関係を築くことになる。だから〈意識〉全体にとって、この関係以外の関係が〈精神〉〈意識（即自はもとより対自も）〉と〈わたし〉（の間）に、見当たらないとされるならば、これらの〈場（部位）〉がそれぞれ、いかなる役割を担うか質す必要がないは当然としても、しからばそれこそ「何のために」持ち出されたのか分からなくなる。まさか彼は三つの〈場〉を成り行きに任せて適当に打ち出し配したわけではあるまいに（「適当に打ち出し配した」との表現に対する、ならびになぜ筆者が次にみる関係は〈精神〉から〈意識（即自）〉への関係になるかに対する、筆者なりの結語は後述に譲ることにする）。

筆者は〈精神〉から〈意識（即自）〉への関係がみられると想定しておく際、以下のことに注意を払わねばならない。すなわち筆者をして〈精神〉を、要は〈精神自身の諸感覚〉

を〈意識（まずは即自）〉と〈わたし〉に関係させるといわせたにしろ、〈諸感覚〉自体が上記二つの各〈場〉に関係するとみるのではないのだと。さすれば何が関係させられると読み得るか。ここでは何がはしかし、〈意識〉全体のなかの一〈場〉たる〈わたし〉（とどのつまりその〈投企〉（など）をさす）であり、〈わたし〉が〈精神〉と〈意識（即自）〉との関係をかたちづくると指摘するだけにとどめく（それでも〈諸感覚〉が〈精神自身の〉と表記されるほどだから、〈精神〉を代表する諸能力とみえることでは、何も〈精神〉と変わらないのではないか。これについても後述しなければなるまい）。そこで〈精神〉から〈意識（即自）〉への関係を質すにあって、〈意識（即自）〉と関係させられるは〈諸感覚〉自体でなしに、〈精神〉だと何ゆえ筆者に語らせたかを見極めておく必要がある。これを解く鍵は筆者がこれまでに語ってきたことにある。一に、〈諸感覚〉について振り返ると、〈諸感覚〉は諸「感情」（嘔吐や不安）とともに、何よりもまず〈意識（即自）〉で〈産出〉され、そしてここから〈精神〉に伝わるとした一方で、サルトルはどういうわけか不思議なるかな、〈諸感覚〉だけをさらに外的〈世界〉から〈精神〉に「受容」さす諸能力と見立てていた（その点で〈精神〉は「実在論」を含意させる〈場〉にみなされるが、彼に〈諸感覚〉に関しこのようにいわせるも、筆者には〈観念（論）〉にすぎなくなると思われる）。だから一に、外的〈世界〉はこの〈諸感覚〉でもって伝えられよう〈精神〉とかかわるのであり、〈意識（即自）〉とではないことになる。そのことは同時に、外的〈世界〉を起因に生じるとされる〈諸感覚〉が〈意識（即自）〉に伝達（関係）されないことを示唆させずにいないのだ（〈諸感覚〉が〈意識（即自）〉に関係しないとみえることはまた、〈諸感覚〉はむろんのこと、〈諸感覚〉から展開されよう諸「感情」（嘔吐や不安）も〈意識（即自）〉に打ち出された諸能力以外でないことを証明させる）。要は一に、〈意識（即自）〉がなかでも外的〈世界〉とかかわる〈諸感覚〉に無関係に捕らえられるは、この〈諸感覚〉が「現実」の諸能力であるに対するに、外的〈世界〉と関係しない〈意識（即自）〉で〈作る〉〈作られる〉作用からの、〈諸感覚〉やその諸「感情」（嘔吐や不安）が諸〈観念〉による諸能力であることにあった。繰返すが、外的〈世界〉の方はそれ自らが自らで〈諸感覚〉（あるいは〈嘔吐〉や〈不安〉）だと語っては〈意識（即自）〉に教えさすこともない。さすれば彼は「現実」の〈諸感覚〉をではないにしろ、「現実」すなわち外的〈世界〉を〈意識（即自）〉すなわち〈観念〉にかかわらせんと意図していたのであろうか。それを彼が述べた〈わたしのために、世界があらわれるようになる〉に聞いてみよう。〈わたし〉とは〈意識〉全体としたうちの一〈場〉を占めていたし、彼がこうして〈わたし〉を前面に立てることは〈精神〉が単独で、筆者にいう〈意識（即自）〉に繋がらないことを意味する。だから外的〈世界〉が〈精神〉にだけでなく、〈わたし〉にもかかわるとみえてくる以上、〈わたし〉が〈わたし〉によって、〈諸感覚〉をでなしに、外的〈世界〉に繋がる（関係する）という〈精神〉を何とかしなければ、〈わたし〉にとっても、外的〈世界〉との「現実」的接触はなくなるし、それどころか、外的〈世界〉のことを含めさせていう、〈意識〉全体を、要するに〈人間存在〉を〈統合〉することができなくなると読む（〈統合〉についても後述せざるを得なくなる）。しかしてその〈精神〉が〈意識（即自）〉に直接にではなく、〈わたし〉が〈精神〉と〈意識（即自）〉の仲に立つことにより、両者に間接にかかわるとみることはそこに、〈わたし〉は外的〈世界〉から「受容される」〈諸感覚〉に関係せぬことも含意させたからして、この〈精神〉への「現実」の〈諸感覚〉はもとより、〈精神〉で〈諸感覚〉からいかに諸「感情」

（嘔吐や不安）に展開されるといわせることになり、かかる諸能力は外的〈世界〉（たとえばマロニエの樹）から〈精神〉にもたらされると語らせようとも、果たして〈精神〉は諸「感情」の機能を有するのか、機能なくば、その〈嘔吐〉や〈不安〉は〈意識（即自）〉の作用で〈作られ〉ねばならなくなろう（それでもここに、筆者はこの諸「感情」が〈意識（即自）〉で〈作られる〉ことを証明し得たわけである）。それに彼が〈わたしは、（諸）感覚を弁護するために、また（諸）感覚に存在を与えるために〉と述べたなかで、筆者にとって、〈わたし〉が哲学（観念）上の〈わたし〉をではなく、サルトル本人をさすとみえたはともかく、彼が〈（諸）感覚〉を〈弁護〉し、これに〈存在を与えるために〉と記したにすぎないのであれば、それはたんに彼の〈欲（願）望〉が語られるとみなし得るだけであり、〈（諸）感覚〉が〈精神〉に「受容され」たのち（「受容され」たといえるは確かに〈（諸）感覚〉が〈精神〉に〈存在〉することになる）、しかしどのように〈精神〉にかかわり〈存在〉するかには触れられていないと、しかしてこの引用文からも、〈（諸）感覚〉が〈意識（即自）〉や〈わたし〉にさえ関係しない（諸）能力であることを明らかにできたと読み取らせるにちがいない。

それゆえ、サルトルが〈諸感覚〉もしくは諸「感情」（嘔吐や不安）を〈実存〉の契機に見立てていたとされるが、筆者にはそうした見方を取ることができない。たとえば哲学（観念）上の〈わたし〉となかでも〈嘔吐〉や〈不安〉との関係をみるは、この〈わたし〉が〈嘔吐（不安）〉に、または〈嘔吐（不安）〉がこの〈わたし〉にかかわる関係ではなく、かかる関係のときにあっては、〈嘔吐（不安）〉とかかわりのない役割をこの〈わたし〉に与える契機（きっかけ）がかたちづくられることにある。この哲学（観念）上の〈わたし〉の役割とは次のことを踏まえて見出されくる。一に、〈意識〉全体のうちの一〈場（部位）〉である〈意識（即自）〉が直接「現実」の〈諸感覚〉と関係しないことは、〈精神〉に「受容され」た、「現実」の〈諸感覚〉に対して、〈意識（即自）〉の反応が同時にか、のちにかは分からねども、〈意識（即自）〉で「現実」の〈諸感覚〉を再度〈思惟（認識）（観念）する〉ことがないだけか、かかる〈諸感覚〉と「関係しない」と彼に強調されるかぎり、〈意識（即自）〉が否定（拒否）する判断に迫られたり、〈意識（即自）〉自らに別の〈観念〉を生み出させたりすることと同意でしかなくなるのだ。別言すると〈精神〉に「受容され」た、「現実」の〈諸感覚〉と〈意識（即自）〉で〈作られる〉諸〈観念〉と、いわば「現実」と〈観念（理想）〉とにおいて、諸〈観念〉が「現実」の〈諸感覚〉から〈作られ〉ないのは確かである一方、この諸〈観念〉を生じさせる〈意識（即自）〉は〈諸感覚〉としてあらわれるだけではない「現実」と、すなわち後段で語ろう〈精神〉とかかわらざるを得なくなる関係を持ち合わすことになる（この関係が〈精神〉から〈意識（即自）〉へのそれであることはすでに触れた）。だからこうした関係を充たすべく、そこに哲学（観念）上の〈わたし〉を登場させて、この〈わたし〉は〈精神〉をば、〈意識（即自）〉で導出された、別の〈観念〉によって、いつかは〈意識（対自）〉に〈向か〉い得るように、〈意識（即自）〉にかかわらせる、〈精神〉から〈意識（即自）〉への関係の成立に役立つ役割を有するわけである。「役割」と記したことについては、ここにほかの〈場〉のそれが確認される。まず一に、〈精神〉（の場）は彼が外的〈世界〉からの「現実」の〈諸感覚〉を〈精神自身の〉と書くほどだから、筆者は〈精神〉のすべてがこの諸能力で構成される印象を受けるしかなくなると、要はこの〈諸感覚〉が〈精神〉に「受容される」という、外的〈世界〉との

関係を有するのが〈精神〉の役割の一であるとみなしおくが、それでも〈精神〉はさらにこの〈諸感覚〉を〈意識（即自）〉に伝えたり、受け入れさす役割にはなかった。だから〈精神〉の役割とはここでは、〈精神〉は〈意識（即自）〉で〈作られ〉し〈諸感覚〉や諸「感情」（嘔吐や不安）なる諸〈観念〉が伝えられる〈場〉として、また〈精神自身〉に外的〈世界〉からの、「現実」の〈諸感覚〉が「受容される」〈場〉としての役割を担っていたと述べるだけにとどめておく（筆者のみるところ、〈精神〉には後述するが、もうひとつの役割がある）。そして一に、〈意識（即自）〉は上記したように、諸〈観念〉を〈産出〉する機能を持ち合わすほか、〈精神自身の諸感覚〉を受け入れない〈場〉、これすなわちかかる〈諸感覚〉を「否定（拒否）」する〈場〉として関係するごとき役割を持つと繰返す以外にない。だから一に、〈意識（即自）〉で〈作られ〉し諸「感情」（嘔吐や不安）さえ何度でも〈思惟（認識）（観念）する〉ことができる以上、何回も〈作られる〉とみえるにせよ、しかし筆者が思うに、そこに〈わたし〉なる〈観念〉が仲に立つや否や、〈わたし〉はではなく、この〈意識（即自）〉は〈嘔吐〉や〈不安〉たる諸「感情」を「否定（拒否）」せざるを得なくさせるのと同然になる（なぜ〈わたし〉はではないかは後述する）。ただし筆者をして、〈意識（即自）〉が〈諸感覚〉と「関係しない」役割を「否定（拒否）」とまで表記させず、かかる関係を済ますに越したことはなかったが、あえて「否定（拒否）」と記させたのには、筆者がみる、それなりの理由に従ってのことであり、ここにこれを明確にする必要があったからである。それはたとえば、かのヴェーユが自らの〈身体〉や〈魂〉を各襲う〈不幸〉を〈受苦〉（ならびに〈世界の美〉を〈歓喜〉）した現実と比べるに、彼は自らの〈意識（即自）〉に、とりわけ〈不幸〉（の中身）とは同じであるはずがない、例の〈嘔吐〉や〈不安〉すら受け入れることをしなかったと、すなわちこれらを「否定（拒否）」したと筆者に強調させるにあったのだ。つまり彼は〈嘔吐〉や〈不安〉を〈意識（即自）〉に「受け入れ」ず、だからこれらがそこでいかに〈存在〉するかと、これらをどうにかしようと〈観念〉するのでもなく、これらを〈観念〉しても即座に、この「否定（拒否）」（なる〈観念〉）をもって、別の〈観念〉に擦り替えては、これらを自らがめざす（実存）哲学（の契機）としてあらわさずにおれなかったと推察される（序でに触れおくと、彼女の場合、〈身体〉や〈魂〉のそれぞれに、また〈身体〉から〈魂〉に「受け入れ」られた能力は彼にいう〈諸感覚〉ではなしに、〈感受性〉であった。しかも彼にあっては、この〈諸感覚〉を〈意識（即自）〉に、〈わたし〉に、〈身体〉にでもなく、〈精神〉にだけ「受容される」能力にみられていたようにしか受け取れ得ないと付け加えおく）。

とまれ、筆者に次に問われるは、サルトルにいう、その哲学（観念）上の〈わたし〉が何ゆえ〈精神〉と〈意識（即自）〉にかかわるとみえたかである。それは繰返しになれど、外的〈世界〉と関係するのが〈精神〉であり、〈意識（即自）〉ではなかったといわせることにある。そしてこのことを、筆者はかかる〈精神〉が〈わたし〉の仲介でもって〈意識（即自）〉とかかわらざるを得なくなるところに見出せると結語せずにおれないのだ。以下に記すは筆者なりの、その証明になる。一に、「現実」の〈諸感覚〉を通して外的〈世界〉と関係する〈精神〉は、彼がまた〈わたしのために、（外的）世界があらわれる〉と述べてもいるからして、〈わたし〉が外的〈世界〉と、もしくは外的〈世界〉が〈わたし〉と不即不離にあるとみては、外的〈世界〉にばかりか、〈わたし〉にさえ無関係でいられなくなると、一方の、〈思惟（認識）（観念）〉を〈作る（能動）〉とその〈作られる（受動）〉

作用しかない〈意識（即自）〉は、これ以外の作用を有することがないと読まねばならなかった。たとえば外的〈世界〉から〈精神〉に「受容され」た、「現実」の〈諸感覚〉に対し、この〈諸感覚〉が〈意識（即自）〉に伝達されようとも、〈意識（即自）〉は自らにこの〈諸感覚〉を「受け入れ」ないことにあった。このことは要するに、〈意識（即自）〉が〈諸感覚〉に「否定（拒否）」なる〈観念〉で答えるに等しい作用を持つだけであることを証しくるのだ。別言すると〈意識（即自）〉は〈意識（即自）〉自らが当の〈理性（知性）〉により目的に定めた、何らかの〈思惟（認識）（観念）〉を、かつその名辞を〈作る〉〈作られる〉作用でもって〈産出〉しつつ、これらのいずれかに従って、自らの目的にさらに働きかけ得ること（能動）が求められていては、外的〈世界〉に直接関係しなくなるとみなされるに反して、〈精神〉の方は〈わたし〉と同様に、外的〈世界〉にかかわらせることを可能にしたが、それでも〈精神〉の外的〈世界〉へのかかわりにあっては、その〈精神自身の諸感覚〉を〈意識（即自）〉に伝達させないとみたので、〈精神〉と外的〈世界〉との関係は外的〈世界〉に関して共通しよう〈わたし〉に託される（だが〈わたし〉は〈精神〉の〈諸感覚〉によるかかわり方と異なる外的〈世界〉との関係に出会うことになる。その相違点は後述してある）し、〈わたし〉が〈意識（即自）〉と結ばれるほかないということである。つまりともに外的〈世界〉と関係のみられる、〈精神〉よりか、〈わたし〉を経由させて、〈意識（即自）〉へとかかわる関係が成り立つのであり、〈精神〉にとっては、外的〈世界〉とのかかわりをこの仲に立つ〈わたし〉に譲る以外になく、その点で〈意識（即自）〉とは間接に繋がれることを示唆させる。しかし「間接に」であろうと、〈精神〉は〈意識（即自）〉に関係せずにいない。「間接に」でしかないのは、〈わたし〉の方が外的〈世界〉とのかかわりを〈わたし〉に受け継がれた役割として担わずにおれないだけか、〈精神〉の方もその〈諸感覚〉が〈意識（即自）〉に伝えられずとも、外的〈世界〉とかかわる〈場（部位）〉に配置されて、〈意識〉全体の一を構成させられると同時に、たえず他の〈わたし〉や〈意識（即自）〉の各〈場〉とも関連していなければ、彼が〈意識〉全体を〈精神〉を含めた、三つの〈場〉とみたことはいかなる関係にも役立ちえず、ましてや〈意識（即自）〉と「間接に」かかわると見立てられるとした表現も必要なくなろうと再度指摘できるからである（この関連こそが後記するが、彼にいう〈統合〉が成ることでなければならぬからでもある）。それに「間接に」しかなれないのは、当の〈精神〉には〈意識（即自）〉に窺えるような〈作る〉〈作られる〉作用がない、要は〈精神〉で〈諸感覚〉さえ〈産出〉させる作用がないために、かかる諸能力はすべて、前記したごとく、〈意識（即自）〉に〈思惟（認識）（観念）〉されて〈精神〉に伝わるか、あるいは（〈諸感覚〉のみは）外的〈世界〉から〈精神〉に「受容される」かにあって、これを〈精神〉側に立ちみれば、〈精神〉は諸能力すべての〈受動〉の〈場〉になるほかなかろう（このことが〈精神〉を〈意識（即自）〉にかかわらせるとしたとて、「間接に」でしかないことを含意させた）からして、〈受動〉の〈場〉が〈能動〉の〈場〉になれないことは、本来諸能力すべてをこの〈精神〉から〈意識（即自）〉に伝えさすことを不可能にするが、しかし〈わたし〉が〈精神〉を仲介し、〈能動〉たる、別の〈観念〉によって、〈わたし〉自らに〈意識（即自）〉との関係を任せられるならば、換言すると外的〈世界〉を〈諸感覚〉で捉える〈精神〉の代わりに、別の〈観念〉の導入からみえてこよう外的〈世界〉と接触させる〈わたし〉を通するならば、〈意識〉全体の三つの〈場〉がおたがいかかわり合えるであろうといえるからである。したがって

三つの〈場〉がかかわる順序は〈意識（即自）〉に何らかの〈観念〉が〈産出〉されて〈精神〉へ伝わることにはじまり、次いで外的〈世界〉自体とかかわる、〈精神〉から〈わたし〉を中継して〈意識（即自）〉へと関係することにあるし、〈意識〉全体はこれを繰返して成るのだ。だがかかる〈観念〉が〈精神〉に伝わらない場合を想定し得る。それでも外的〈世界〉との関係が例の「現実」の〈諸感覚〉の場合を除いても、〈わたし〉にみられるからして、「次いで」と記したように、その関係順は〈精神〉から〈意識（即自）〉へであって、逆の関係にならないことに注意しなければならない。とくに〈精神〉から〈意識（即自）〉への関係において、再度いうが、外的〈世界〉とかかわることでは、〈精神〉と同様な〈わたし〉が〈精神〉を仲立ちさせずに、〈意識（即自）〉との関係はむろんのこと、この〈意識（即自）〉を〈意識（対自）〉に〈変化（変身）〉させる関係での〈統合〉すら可能にならないとみることができる。そのことなくば、〈わたし〉や〈意識（対自）〉は何のために用意されたのかが分からなくなる。いやこれらは筆者に理解されていないだけのことであり、彼自身は〈わたし〉や〈意識（対自）〉をはじめとした諸〈観念〉用語に各役割を当てはめ、各関係させた〈統合〉を、強いていえば哲学（観念）上の〈統合〉をめがけんとしていたのだ。つまり彼にとって、この〈統合〉とは〈精神〉に繋がれた〈わたし〉がその〈精神〉と〈意識（即自）〉を取り込んで、〈意識〉全体を、換言するとこの〈統合〉によって、〈この対自とこの世界〉を、要は〈意識〉全体の三つ〈場〉である、〈意識〉と〈わたし〉ならびに外的〈世界〉（に共通にかかわる〈精神〉）を〈一致〉させることにあった。だからその〈わたし〉が同じく外的〈世界〉にかかわる〈精神〉（から）と〈意識（即自）〉とを結びつける役割を有することで、〈わたし〉ははじめて〈意識（即自）〉を〈意識（対自）〉に〈変化（変身）〉せしめ得たわけである。これが〈わたし〉による、〈精神〉から〈意識（即自さらに対自）〉への関係が成るといえる事由であり、〈精神〉の次に質されるは〈意識（即自や対自）〉のことになろう。

しかしそこに移る前に、〈わたし〉がかかわる外的〈世界〉とは、それこそその〈わたし〉とは何であったのかが確かめられねばなるまい。最初の問いである、哲学（観念）上の〈わたし〉に関係する外的〈世界〉は繰返すが、あの「現実」の〈諸感覚〉が〈精神〉に「受容される」ところで浮かび出す外的〈世界〉ではなく、何よりもまず〈意識（即自）〉が自らの対象にした〈わたし〉に働きかけ、「別の（観念）」を〈わたし〉に与え託させては、この〈わたし〉をして「別の〈観念〉」を実行せしめるところにあらわれる外的〈世界〉なのであり、外的〈世界〉は同じそれと捉えられども、そこにあえて違いを見出しおくならば、かかる問いで先記した〈受動〉にか、後記した〈能動〉によるかしてみえていたことにあろうと読むことができる。そこで以上のことが、また次の問いであった「その〈わたし〉とは何」かがさらに具体的に語られるべく、筆者は〈わたしが…投企である〉や〈身体は捕えどころがないために、世界の諸対象に、すなわちわたしが認識したり、利用したりする諸対象に属しているのではない〉という既出引用文に再び聞いてみる必要がある。筆者がこれまで遠回しに表現してきた語句「別の〈観念〉」に該当しよう語は、上記一番目の既出引用文で再度確認せずとも、その〈投企〉でしかないことが、またときに「〈投企〉（など）」と表記した「など」には、〈投企〉のほか、〈参加〉〈行動〉や〈選択〉の各語を含むことが（だが〈参加〉以下の語意は容易に察しがつくのに比べ、「投げ企てる」、当の〈投企〉のそれは具体的でないと思える）、そして〈投企〉（など）を諸〈観念〉に終始させないと

みえるも、〈投企〉（など）をして、換言すると哲学（観念）上のではない〈わたし〉をして、他の各役割を担わせるからであることが明かされるにちがいない（以下では各語は〈投企〉を代表に言及される）。〈投企〉すなわち〈わたし〉は一に、〈精神〉から〈意識（即自）〉へとかかわるごとくに捉えられた、〈能動〉的〈観念〉であり、かかる〈観念〉は同時に、「現実」の〈諸感覚〉による外的〈世界〉との〈受動〉的接触とは異なる外的〈世界〉を展望させるとしたところにあった。〈意識（即自）〉にて、〈投企（わたし）〉（〈わたし〉は哲学（観念）上の〈わたし〉である）を〈思惟（認識）（観念）する〉ことでもたらされる、こうした〈観念〉がむろん、（諸）〈感覚（という観念）〉と諸「感情」（嘔吐や不安）という諸〈観念〉と同様に、当初この〈意識（即自）〉以外から〈産出〉されないことでは、〈観念〉として受け取られるほかなくなるだけか、さりとて（諸）〈感覚〉や諸「感情」とおよそ相違する〈観念〉（の中身）である一方、〈投企（わたし）〉がその〈観念〉でなくなるためには、前記していた通り、「現実」の〈諸感覚〉が〈精神〉に〈受動〉的にかかわる外的〈世界〉にではなく、〈投企（わたし）〉が〈能動〉的に外的〈世界〉に飛び込ませ得るし、外的〈世界〉を、〈意識（即自）〉にはじめて、いやそれどころか〈意識（対自）〉にさえかかわらせ得るようにならなければならぬとみることができた。要は〈意識（即自や対自）〉は〈投企（わたし）〉を通して現出されるが、しかしそのことは〈投企（わたし）〉がそれ自身によって、そのめざす対象を、いの一番に外的〈世界〉（の展望）に据えるのではなく、何より〈観念〉に終始しない〈投企（わたし）〉に、かつ〈意識（対自）〉に定めることを含意させた。さすれば〈投企（わたし）〉は〈精神〉をではなく、〈意識〉を〈対自〉にすることが目途となる〈観念〉であり、しかして〈観念〉ではなくなるであろう。だが〈意識（対自）〉をめがけるにあっては、〈意識（即自）〉に、しかも〈精神〉との関係から〈意識（即自）〉にかかわらねばならなかった。そのとき筆者はなぜ上記して「〈投企（わたし）〉は〈精神〉をではなく」といえたのか。それは〈精神〉が〈即自〉や〈対自〉なる各〈存在〉として問われることはないからである。加えて〈意識（即自）〉はともかく、〈精神〉が〈投企（わたし）〉の仲介によってでなければ、〈投企（わたし）〉は〈精神〉にかかわるとされる外的〈世界〉に〈受動〉的でなしに、〈能動〉的にかかわり、その外的〈世界〉を展望することができないと、外的〈世界〉との、この接触なくば、これも後述に譲るほかない〈統合〉が、したがって〈自由〉が成立しないと述べるだけは可能になるからである。

しかしサルトルが〈観念論的立場を完全に放棄する〉といい、それで〈存在論〉を主張したのか、その理由は筆者に明確になり得ぬども、筆者なりに察すれば、次に記すこともこの一に加えられるであろうか。すなわち〈投企（わたし）〉が〈観念（理想）〉と「現実」とに亘って語られていたことにあると。要は〈投企（わたし）〉には〈観念〉上でのそれと「現実」上での〈投企（わたし）〉とがみられると。上記語句のごとく、彼は〈観念論〉を否定する。しからば彼にいう〈認識論〉は〈実在論〉か。なんらかの〈観念〉なしに、一度足りとて、その〈観念〉の「現実」が彼に浮かび出てはこないと読み得る。このとき当の〈投企（わたし）〉はどうなのか。たとえばヴェーユに、マルクスが「現実（物質）」（実在（唯物）論）に相反する思想（観念論）を持ち込んだ（〈物質〉を人間に役立たせるにどうするか〈思惟（認識）（観念）する〉）がゆえに、マルクスのかかる思想は〈矛盾〉を露呈させずにいないと洞察させたことを持ち出し、サルトルに比べれば、筆者はマルクスのいうそれとはおよそ逆に、つまりサルトルは〈観念（理想）（論）〉に、〈投企（わたし）〉た

るべき「現実」を取り入れざるを得なくなったと捉えることができるにちがいない（こうした「現実」も筆者からすると、その〈投企（わたし）〉の役割を語るにすぎない〈観念（理想）〉に見立てられるように思われる。なぜそういえるか、これもまた後述せねばなるまい）。それでサルトルはマルクスでみる「現実」と〈観念〉との〈相反する思想〉を逆の順にしたとはいえ、〈矛盾〉に変わりがなくとも、〈矛盾〉を回避させるためか、あるいはこの〈矛盾〉を遠ざけさすうえで、この〈認識論（観念論や実在論）〉に関係させないためか、〈存在論〉に走ったかにみえてくるのだ。少なくとも彼が〈認識論（観念論）〉に関知させない立場に立とうとしていたならば、それが〈存在論〉を証明するのに欠かせないか否かは知らされねども、筆者にすると、かの〈投企（わたし）〉や既出した〈無化〉と〈無〉などの諸語（観念用語）が、たとえば〈投企（わたし）〉という、実際の〈能動〉的働きでみえてくる「現実（外的〈世界〉）」とのかかわりなくして、彼はこの〈わたしの存在〉と外的〈世界〉の存在を、〈意識存在〉（〈存在意識〉）と〈即自存在〉や〈対自存在〉と同様に、どうして各〈存在論〉として語ることができたのかであろう。

とまれ、筆者が〈投企（わたし）〉と表記したは確認するに、〈投企〉すなわち〈わたし〉を、あるいは〈わたし〉すなわち〈投企〉をさすし、〈わたしが…投企である〉と記されたことによった。とはいえ筆者はかかる表記を一度は個別に説明してみなければなるまい。まず〈投企〉の方は一に、それが「現実」にかかわらんとする前に、〈意識（即自）〉の〈能動〉的働きで〈産出〉された〈観念〉であった。だが一に、〈投企〉の〈観念〉は同じ〈意識（即自）〉の〈能動〉的作用でもたらされたり、命名されたりした〈諸感覚〉や諸「感情」（嘔吐や不安）の諸〈観念〉とは、ならびに外的〈世界〉から、〈精神〉の〈場（部位）〉に「受容される」、「現実」の〈受動〉的〈諸感覚〉とは相違させられていたし、そのうえ〈投企〉の〈観念〉は〈意識（即自）〉が外的〈世界〉に関係しないとサルトルにいわせるからして、この〈受動〉的〈諸感覚（「現実」の諸能力）〉を「否定（拒否）」した〈観念〉とほぼ同じことになり、その「否定（拒否）」した〈観念〉に入れ代わったと、換言すると彼に、「否定（拒否）」の〈観念〉が即座に〈投企〉の〈観念〉を呼び起こさせたとみることができた。序でにここで、すでに触れた、〈実存〉の契機のことを付け加えおくと、かかる「契機」はかの〈嘔吐〉や〈不安〉にみられると指摘されるのではなく、筆者にすれば、むしろ〈投企〉にあると捉えさせよう。なぜか。かの〈嘔吐〉や〈不安〉はそれらとして、外的〈世界〉から〈精神〉にさえ「受容され」ないばかりか、その〈精神〉はそう命名する作用もないためである。だから〈実存〉の「契機」は、〈意識（即自）〉がその〈場（部位）〉で〈産出〉された〈諸感覚〉や諸「感情」（嘔吐や不安）の「否定（拒否）」（の〈観念〉）をして「別の〈観念〉」すなわち〈投企〉（の〈観念〉）を打ち出させる「契機」でしかないと断じたわけである。「契機」とは思うに、〈意識（即自）〉がその目的にあろう〈意識（対自）〉に成る、すなわち〈無〉すなわち〈自由〉に成るうえで、〈意識〉全体（ヴェーユでいえば〈魂〉）を、もはや〈理性（知性）〉以外の諸能力（主に「現実」の〈諸感覚〉）の、いわば受け皿であろう〈精神〉に、または〈意識（即自）〉で〈作られ〉し〈嘔吐〉や〈不安〉に従わせるのではなく、〈即自〉から〈対自〉に向かわせるべき、当の〈意識〉にかかわらせねばならぬことが示唆されるとともに、この〈意識〉に〈わたし〉を、さらに〈わたし〉だけでなく、後述しよう〈身体〉を伴わせて語られる、〈観念〉でない、「現実」の〈投企〉こそ〈無〉すなわち〈自由〉をめざす、〈実存〉の「契機」であらねばならないことにあった。なぜなら、〈意識（即

自)〉が自ら一担は〈産出〉し得た、例の〈嘔吐〉や〈不安〉(の諸〈観念〉)を「否定(拒否)」することは、当然これらを容認しないことであり、この際は〈意識(即自)〉は同時に、そこからどうすべきかを〈思惟(認識)(観念)する〉ことが課せられて、〈投企〉の〈観念〉を導き出すにせよ(容認のままでは〈投企〉の〈観念〉は生じないと思われる)。この〈投企〉すら〈観念〉にとどまっていては、かかる〈観念〉は実際に〈作られる〉、筆者にいう「行動(運動)」にあろうが、それでも〈意識(即自)〉内だけの「行動(運動)」によるにすぎないのだから、要は〈意識(即自)〉のみではその外(部)に動けない(働きかけない)のだから、「現実」の「行動(運動)」たる〈投企〉をば語ることにならない、したがってこの〈投企〉の「現実」を語らせるには、換言すると〈投企〉が〈観念〉に終始しないためには、「現実」の〈投企〉は〈わたし〉ばかりか、〈身体〉も加味されることが必要であるとみえるからである。〈投企〉(なるもの)にとって、「現実」に、〈意識(即自)〉内を動く(「行動(運動)」する)ほか、動く(「行動(運動)」する)〈わたし〉と〈身体〉が欠けてはならなくなる。〈投企〉の真意がこの〈わたし〉と〈身体〉の各「行動(運動)」なくして、〈意識〉全体(ヴェーユでいえば〈魂〉)はどうして〈即自〉に、そのねらいとする〈対自〉に、〈わたし〉に、はたまた外的〈世界〉(あるいは外的〈世界〉に関係する〈精神〉)に出会い得るか、とどのつまり〈統合〉に近づくことが可能になるのか、もはや否なのである。

その際、「否定(拒否)」と〈投企〉の各〈観念〉が何ゆえ、あたかも表裏のごとくに同時にかたちづくられると筆者に捉えさせたかに(順次)答えおく必要がある。〈意識(即自)〉において、外的〈世界〉から〈精神〉に「受容される」、「現実」の〈諸感覚〉を「否定(拒否)」することはなるほど、〈意識(即自)〉が自らにかかる〈諸感覚〉を「受け入れ」ないことを、要はこうした〈諸感覚〉を「容認しない」のも、さらに〈嘔吐〉や〈不安〉を「否定(拒否)」し得るのも、〈意識(即自)〉が自らにこれらを「受け入れ」ないことをだけか、「受け入れ」ないとみたことはそれでも、〈精神〉と〈意識(即自)〉とを〈精神〉から〈意識(即自)〉へと結びつけさす(関係させる)ことを示唆させる。そしてここに、筆者にすれば、サルトルとヴェーユの各思想的相違をみることができよう。彼に〈意識(即自)〉が外的〈世界〉に関係しないと、つまり外的〈世界〉からの、「現実」の〈受動〉的〈諸感覚〉と関係しないといわせたこと(筆者が上記に「受け入れ」ないと書いたこと)に反して、彼女(の思想)は外的〈世界〉(自然の〈必然性(不幸もしくは世界の美)〉を「受け入れ」たことに基づいていた。もちろんこの〈不幸〉や〈世界の美〉と、彼にいう、例の〈嘔吐〉や〈不安〉が同じであるとみてはならない。彼女の場合、かの〈精神〉に「受容される」、「現実」の〈諸感覚〉や〈意識(即自)〉で〈作られ〉し諸「感情」(嘔吐や不安)でではなく、〈身体〉や〈魂〉の各〈感受性〉でもって、または〈身体〉から〈魂〉へ伝わる〈感受性〉でもって、その〈量〉たるをさしていう〈不幸〉(筆者は〈不幸〉を人間への「負」の〈妨害〉とみなす)や〈世界の美〉(筆者は〈世界の美〉を人間への「正」の〈妨害〉とみなす)を「受け入れ」ることにあった。〈不幸〉や〈世界の美〉はその各命名が〈理性(知性)〉に確かに委ねられてはいるが、だからといって、彼にいう〈意識(即自)〉で〈作る〉〈作られる〉諸〈観念〉としてもたらされているのではなかった(〈嘔吐〉や〈不安〉の各〈観念〉はまた〈意識(即自)〉にあって、いつでも〈思惟(認識)(観念)する〉ことで生み出されようし、その作用の試みなくば、〈意識(即自)〉はいつでも〈嘔吐〉や〈不安〉を

打ち出せないのだから、「否定（拒否）」したと同じことになろう）。

この段落以降ではしばし、筆者が前段までに述べてきた、ヴェーユにいう〈感受性（sensibilité）〉について、この語がサルトルの『存在と無』に記されるか、散見されるならば、彼女のその使い方と同じか違うかを質しおかねばならないであろうし、また〈意識（即自）〉で〈能動〉的に〈産出〉される〈諸感覚〉や諸「感情」（嘔吐や不安）について、〈意識（即自）〉がこうした諸能力を〈精神〉（の場）に伝えるという〈精神〉について、一方で筆者には同じようにみえる〈諸感覚〉のうち、わけても「現実」の〈諸感覚〉としてその〈精神〉に〈受動〉的にかかわらせる、対象たる外的〈世界〉について、かつ〈わたし〉について、それから〈身体〉について、筆者なりの論の展開を試みるためにも、ここら辺りで少しくまとめおくことが必要であろう。まず、筆者が上記作品『存在と無』のなかで知るかぎり、彼は〈感受性（sensibilité）〉の語を二度使用し、それぞれ〈私の感受性（ma sensibilité）〉[(4)]や〈わたしたちの感受性（notre sensibilité）〉[(5)]と表記していた。なかでも〈わたしの感受性〉にあっては、次に引用する文章にかかわらせて記されるからして、筆者は彼にいう〈感受性〉を以下でみるごとくに読みとるほかなくなった。

> Autrui, comme unité synthétique de ses expériences et comme volonté autant que comme passion, vient organiser mon expériences.[(6)]

> 他者は他者の諸体験の統合的一致として、また意志や情念として、わたしの体験を組織立てにくる。

上記引用文の文意に添っては以下のことがいえる。一に、筆者は〈他者〉にかかわり生じるのが〈感受性〉（〈わたしの感受性〉や〈わたしたちの感受性〉）であるとみることができる（〈他者〉にいかにかかわるかは後述する）。このなかで一に、〈わたしの感受性〉とされた〈わたしの〉とは、さらに〈わたしの体験〉という〈わたしの〉とはいずれも哲学（観念）上の〈わたし〉をではなく、サルトル本人をさす〈わたし〉であると断わっておく。なぜかは他方で〈わたしたちの（notre）〉と書かれることによって、〈感受性〉は生ある、「現実」の彼すなわち〈わたしの〉を含む〈わたしたちの感受性〉でなければならぬからである。だからこの点で、サルトル本人たる〈わたし〉が〈感受性〉を生み出すことになる、要はその〈わたし〉が〈感受性〉であると受け取ってかまわぬわけである。しかしこの〈感受性〉を例の〈諸感覚〉にいう〈能動〉や〈受動〉に比べる際、〈感受性〉はこれと同様に捉えられるのか。彼は〈諸感覚〉が哲学（観念）上ではもっぱら〈能動〉的能力としての、「現実」では〈受動〉的能力としての〈存在を与え〉られていると述べていた。つまり〈諸感覚〉は、哲学（観念）上にあって、〈意識（即自）〉で〈作られる〉ばかりか、〈意識（即自）〉から〈精神〉（の場）に伝えられるとした一方で、「現実」にあっては、外的〈世界〉から〈精神〉（の場）に「受容される」ということであった。しかしながら彼はこうした〈諸感覚〉におけるごとき説明を、こと〈感受性〉に対してほとんど試みなかった。試みたと予想しても、彼はたんに、〈諸感覚〉の場合と同様に、〈感受性〉の対象が外的〈世界〉を構成しよう、〈即自存在〉なる〈事物や他者（他人）〉であると説明するほかなかった。だがそこから、その対象は上記引用文に窺えるように、〈事物〉で

はなく、〈他者〉であり、しかも〈他者〉が〈他者の諸体験の統合的一致として、また意志や情念として〉彼なる〈わたし〉に接近するときにだけ、あるいは彼なる〈わたしの体験〉といわせるからして、この「現実」のときにだけ、彼なる〈わたし〉は〈受動〉的にかかわらせる〈他者〉に、その〈わたしの感受性〉でもって対応させることができたと読まなければならなくなるのだ。なお筆者はこの場を借りて、以下のことを、すなわち一に、「彼なる〈わたし〉」とはもとより、哲学（観念）上の、〈意識〉内における〈わたし〉（の場）を、また後述する、「現実」の〈投企〉（など）における〈わたし〉をさすのではないことを、また一に、ここでいう〈他者〉はむろん、外的〈世界〉の一として語られる〈他者〉のことであり、〈意識〉内の〈わたし〉は〈他者〉であるとされた〈他者〉ではないことを、さらに一に、これも後述するが、上記引用文中の語句〈統合的一致〉は外的〈世界〉の一たる〈他者（他人）〉が成り立つうえで不可欠な条件にみられるとともに、哲学（観念）上の、〈意識〉内における、〈他者〉なる〈わたし〉や〈意識（対自）〉（〈この対自とこの世界との統合〉を想起せよ）にも関係せずにいないことを断りおく。このようにみると、サルトルにいう〈感受性〉の用法はヴェーユにいうそれと大いに異なることが明らかとなる。彼女にいう〈感受性〉の用法はすでに語ったがゆえに、繰返すことはしないが、一言でいうと、〈感受性〉は哲学の基軸をかたちづくっていた。これに対し、彼にみる〈感受性〉は筆者には、彼の哲学の基本ではないどころか、各〈わたし〉が〈存在〉したに似るごとく、ことを複雑にさせるに用いられる、つまり余計でさほど問題にさえならない用語にしか映らないということになる。

このサルトル本人なる〈わたしの感受性〉とほぼ同じように扱われるのが、筆者にすれば、あの〈諸感覚〉や諸「感情」（嘔吐や不安）であったにちがいなかろうと察知される。まず〈諸感覚〉について語っておくと、一に、たとえば〈意識（即自）〉で〈産出〉された〈投企〉という〈観念〉によって、〈諸感覚〉は〈意識（即自）〉への「受け入れ」の「否定（拒否）」という〈観念〉に出会うことになったと受け取られ得る。だから上記に例とした〈投企〉（観念）は、〈意識（即自）〉に外的〈世界〉をはじめとした〈諸感覚〉の「受け入れ」を「否定（拒否）」（観念）せずにもたらされなかった点で、その「否定（拒否）」に同時か、次ぐかするとみえるがゆえに、〈諸感覚〉あるいはこの「否定（拒否）」に取って代わられたわけである。ここに述べたうち、外的〈世界〉に対しては、彼にいう哲学（観念）上や「現実」における、〈精神〉が〈諸感覚〉として〈受動〉的に、また〈わたし〉が例の〈投企〉として〈能動〉的に各かかわることができたと、換言すると外的〈世界〉に〈受動〉的に、また〈能動〉的にかかわるはそれぞれ、哲学（観念）上や「現実」における各〈諸感覚〉であり、各〈わたし（投企）〉であるということであろうが、しかし当の〈諸感覚〉について、彼はヴェーユが諸〈感覚は質料、空間、時間も含まず〉と語ったような指摘さえ一切しなかったのだ。しかも〈諸感覚〉は彼の哲学に有って無きがごとき諸能力にみられる。しかるにこの〈諸感覚〉にあって、一に、〈意識（即自）〉に生じた諸〈感覚という観念〉を〈精神〉に伝わらせ、〈精神〉に〈存在〉することが、一に、「現実」の〈諸感覚〉能力として〈精神〉に〈存在〉することが証しされてくる。つまり両〈諸感覚〉には〈精神〉にとって、一方にいう、〈意識（即自）〉から伝わる〈諸感覚〉の、他方にいう、外的〈世界〉から伝わる〈諸感覚〉の各「受容される」（受動）能力が在るといえるし、いずれも〈精神〉に「受容される」からこそ、彼が記した通り、諸〈感覚に存在を与える〉こと

が可能になった。

だが以上のように、サルトルが外的〈世界〉と唯一〈受動〉的に関係させるとされた、〈意識〉全体のうちの一〈場〉〈精神〉について、〈精神〉はそこに「現実」の〈諸感覚〉さえ住まわ（存在さ）せたと語ったとて、筆者には当の〈精神〉（の場）はそれ以上何も為し得なかったとみておくほかなくなる。このことは後述する、哲学（観念）上のか、「現実」のかの各〈わたし〉についてもまた、こうした〈精神〉の在り方とほぼ同じにみえるといわせ得る。「それ以上何も為し得な」いとは、〈精神〉がそこに〈諸感覚〉を〈存在〉させるほかのことに対して、あるいは哲学（観念）上のか、「現実」のかの各〈わたし〉が〈投企〉に等しく置き換えられるほかのことに対して、たとえば、〈精神〉や〈わたし〉がそれぞれ、外的〈世界の諸対象〉からもたらされる〈諸感覚〉を、また〈投企〉を〈わたし〉に〈存在〉させる以外を、かつ〈投企〉以外の〈思惟（認識）（観念）〉をさらに〈認識したり、利用したりする〉ことができないことを含意させるにある。要は〈意識〉全体に組み入れられてある〈精神〉や〈わたし〉はおのおの、〈精神自身の諸感覚を産出〉する機能を、ましてや外的〈世界の諸対象〉に立ち会えても、そこからかかるべき〈思惟（認識）（観念）〉を〈産出〉する機能すら持ち合わることがないということである。だからこの段落で扱う〈精神〉がそれ自身で〈認識したり、利用したり〉しては、彼の哲学は〈矛盾〉に陥る。なぜなら少なくも〈認識したり〉するはこれも哲学（観念）上の〈意識（即自）〉であるとみていたからである。にもかかわらず、彼の表記は〈わたしが認識したり、利用したりする〉であった。しからばその〈わたし〉は何か。ここでは〈わたし〉はサルトル本人をさすと、サルトル本人は哲学（観念）上の〈わたし〉ではなく、「現実」の〈わたし〉の謂であり、しかも〈わたし〉がサルトル本人の〈意識〉としてみられると受け取っておく必要がある。わけても〈精神〉に関し繰返してでもいわねばならぬが、〈精神〉は〈意識（即自）〉で〈産出〉された〈諸感覚〉や諸「感情」（嘔吐や不安）なる諸〈観念〉が伝えられては、〈精神〉にこうした諸〈観念〉を〈存在〉させる〈場〉としてある一方（かかる〈存在〉とは〈精神〉側からみると、諸〈観念〉が〈精神〉に「受容される」〈受動〉的〈存在〉になる）、〈精神〉がこの哲学（観念）上のことよりか、彼にサルトル本人をさしていう、かの「現実」の〈わたし〉がみられるくらいだから、これに倣って、いわば「現実」の〈精神〉と語られようときにだけ、その〈精神〉には当然「現実」の〈諸感覚〉が「受容され」て〈存在〉させられるしかなくなる（すると哲学（観念）上のことでは、外的〈世界〉からの「現実」の〈諸感覚〉が真に「受容される」のか、筆者がみたかぎり、彼にその答えを見出せなかった）どころか、哲学（観念）上の〈精神〉も「現実」の〈精神〉もそれ以外に〈意識〉全体にとって役に立つ、いかなる作用も「為し得な」いと指摘しておくことにある。さらに付け加えるべきは、〈意識〉全体を語るにあって、彼は〈意識（即自や対自）〉のほかに、何ゆえここでいう〈精神〉を、あるいは〈意識〉すなわち〈わたし〉とは捉えはしなかったところでの〈わたし〉を持ち出さねばならぬのかにある。彼は〈意識（即自）〉に関係しない外的〈世界〉と、外的〈世界の諸対象〉からもたらされる、「現実」の〈諸感覚〉とにかかわらせるために、「現実」の〈精神〉を、あるいは〈投企〉をはじめとした〈参加〉〈行動〉や〈選択〉にかかわらせるために、哲学（観念）上のか、「現実」のかの〈わたし〉を〈利用〉（用意）していたと、要は彼は外的〈世界〉とその〈諸感覚〉や〈投企〉などがそれぞれ、〈意識（即自）〉にではなく、まずは〈精神〉や〈わたし〉にかかわるようにして、かかる〈精

神〉や〈わたし〉を〈思惟（認識）（観念）〉していたということであろう（したがって上記中の「現実」の〈精神〉が語られる以前に、哲学（観念）上の〈精神〉もなくてはならないだけか、そこからも彼の哲学は〈観念〉で成ることなしに、その「現実」をみることができないことになる）。なぜなら〈精神〉や〈わたし〉が打ち出されたことで、例の〈この対自とこの世界と〉が〈統合〉すると断じられるからである（〈この世界〉は〈わたし〉と外的〈世界〉を含意させていた）。

それはともかく、諸「感情」（嘔吐や不安）の方はどうか。外的〈世界〉から〈意識（即自）〉に「現実」に「受容される」ことがなく、それでいて哲学（観念）上の〈意識（即自）〉に現出し得る諸「感情」（嘔吐や不安）はこの点、哲学（観念）上のか、「現実」のかのいずれでももたらされよう〈諸感覚〉とは相違しているとみておかねばなるまい。だがそこに共通点は見当たらないのか。このどちらも〈精神〉に伝えられると指摘した以上、諸「感情」（嘔吐や不安）と〈諸感覚〉は〈精神〉で〈作る〉（能動）〈作られる〉（受動）作用に与かることがないと、要は〈精神〉にはサルトルに語られるように、これら能力の〈能動〉〈受動〉による〈産出〉作用がないということになる。〈精神〉にみられるのは〈精神〉が対〈意識（即自）〉との、かつ対外的〈世界〉との各関係にあって、それぞれ〈受動〉的に作用するだけであり、〈能動〉的に働くのでないことである（この本文でいう〈能動〉〈受動〉は一能力を〈産出〉させる際の〈能動（作る）〉〈受動（作られる）〉作用によるのでなしに、〈意識〉全体のうちの〈意識（即自）〉と〈精神〉での、あるいは外的〈世界〉と〈精神〉での各〈受動〉関係によることをさす）。たとえば、哲学（観念）上のにしろ、「現実」のにしろ、〈精神〉に「受容され」た〈受動〉の〈諸感覚〉は繰り返しいうが、〈精神〉で〈産出〉されるのでないからして、〈諸感覚〉は〈意識（即自）〉で〈産出〉されるほかなく、そこから〈精神〉に〈能動〉的に伝えられたと捉えおかねばならぬわけである。このことは、筆者が思うに、一に、哲学（観念）上の〈諸感覚〉はむろんのこと、諸「感情」（嘔吐や不安）をはじめとした、諸〈観念〉（例の〈投企〉も含む）なる諸能力はすべて、これらが〈意識（即自）〉で〈産出〉され、〈精神〉に伝わるという関係を証左させるばかりか、〈精神〉にかかる諸〈観念〉として〈存在〉することを含意させずにいない。また一に、「現実」の〈諸感覚〉は外的〈世界〉から〈精神〉（の場）に「受容され」、〈存在〉すると語られる一方で、哲学（観念）上の〈諸感覚〉や諸「感情」（嘔吐や不安）、他の諸〈観念〉なる諸能力もすべて〈意識（即自）〉で〈作られ〉て、〈精神〉（の場）に伝わり「受容され」、そこに〈存在〉すると繰返しおく。こうしてみると、筆者は〈意識（即自）〉にはすでに触れた通り、〈理性（知性）〉能力の働きだけが認められるし、この〈理性（知性）〉能力を〈意識（即自）〉に残存させ、そこから〈理性（知性）〉能力を駆使し勝ち得た、諸〈観念〉なる諸能力がすべて〈精神〉（の場）に伝えられたと、要は〈意識（即自）〉はそこに〈理性（知性）〉能力以外のかかる諸能力を必要としないがために、この諸能力は〈精神〉に伝わるといわなくてはならない。加えて「現実」の〈諸感覚〉が外的〈世界〉からしか〈精神〉に「受容され」ないといわせることで、何が分かるか。一に、「現実」の〈諸感覚〉をもたらす外的〈世界〉はこれがかかわる〈精神〉をして〈意識（即自）〉に関係させない、つまり〈意識（即自）〉はこの外的〈世界〉に関係しないことが、さらに哲学（観念）上で、〈精神〉に伝えられたと記す〈諸感覚〉も上記と同様であることが諒解される。しかして一に、哲学（観念）上で〈精神〉に〈存在〉する〈諸感覚〉は、ならびに外

的〈世界〉から〈精神〉に「受容され」たとはいえない諸「感情」(嘔吐や不安)は再度指摘するが、〈精神〉でではなく、〈意識(即自)〉で〈産出〉されることになった。だが、わけても諸「感情」(嘔吐や不安)はなぜ〈精神〉に見出せぬのか。一に、諸「感情」は外的〈世界の諸対象〉を「見」「聞き」「触れる」などの〈諸感覚〉とは違い、その外的〈世界〉から〈嘔吐〉や〈不安〉として〈精神〉を襲うことはないし、ましてや〈意識(即自)〉を襲うとみられないのは、〈嘔吐〉や〈不安〉が〈意識(即自)〉で〈作られる〉ほかなかったにしても、この原因を外的〈世界〉に求めることは不可能なのだ。何せ、〈意識(即自)〉は外的〈世界〉と無関係であると彼にいわせたから、要は外的〈世界〉は〈意識(即自)〉に関係しないから、〈嘔吐〉や〈不安〉は〈意識(即自)〉で〈作られる〉しかなかったわけである。それに外的〈世界〉は一見していた通り、それ自らが〈嘔吐〉だ〈不安〉だということなどあり得ないからである。さらに一に、この諸「感情」について語ると、〈嘔吐〉や〈不安〉は彼にあって、哲学(観念)上の、または「現実」の各〈諸感覚〉とかかわったうえで、その展開(発展)として生まれ変わるとみることができない。諸「感情」(嘔吐や不安)は各〈諸感覚〉と切り離されて、単独(独自)に〈産出〉されたと捉えおくべきである。彼に外的〈世界〉から「見」「聞き」し「触れる」などした、「現実」の〈諸感覚〉が〈精神〉に「受容される」に従って、〈精神〉で諸「感情」(嘔吐や不安)を成立させるようにもくろまれるとみられるならば、〈精神〉には諸「感情」(嘔吐や不安)を〈産出〉させる作用が存するということになり、かかる諸能力が〈意識(即自)〉で〈作られる〉と断じられたことに〈矛盾〉するにちがいなかろうからだ。そして一に、筆者がことさら強調させておきたいは、〈意識(即自)〉が外的〈世界〉に関係しないとみえるがゆえに、諸「感情」(嘔吐や不安)にとっては、「現実」のそれらが見当たらなくなること、つまり〈意識(即自)〉でのそれらにしかならないこと、またこの哲学(観念)上の諸「感情」(嘔吐や不安)が〈精神〉に伝えられたあと、その〈精神〉から〈意識(即自)〉へとさらに伝わろう(戻ろう)とする関係を有することはないこと、なおまたこれと同様に、哲学(観念)上の、あるいは「現実」の〈諸感覚〉にあっても、各〈諸感覚〉がその〈精神〉から〈意識(即自)〉への関係をかたちづくることがないことである。つまるところ〈精神〉における諸「感情」(嘔吐や不安)と〈諸感覚〉にはそれぞれ哲学(観念)上のであれ、「現実」のであれ、〈意識(即自)〉に対する〈能動〉作用がないといえるからして、これら諸能力による、〈精神〉から〈意識(即自)〉への関係は成り立たないということである(またさらに、筆者がここで、諸「感情」として捉えられた、彼にいう〈嘔吐〉や〈不安〉を、〈感受性〉として捉えられた、ヴェーユにいう〈不幸〉や〈世界の美〉に比べてみるに、その各原動力たる能力に違いがあるほか、相違は〈嘔吐〉や〈不安〉が外的〈世界〉にかかわらない、要はこの「現実」を「見」ようとせずに、かかる諸「感情」を彼なる〈意識(即自)〉でたんにこのように〈思惟(認識)(観念)〉させられていたに反し、彼女が〈不幸〉や〈世界の美〉を外的〈世界〉にかかわらせ、要はこの「現実」を「見」ようとするところに見出されるといっておかねばならない)。

それでは〈精神〉から〈意識(即自)〉へと関係させるは何か。「何か」はもとより〈わたし〉であり、〈わたしが…投企である〉ゆえに〈投企〉でさえある。そこで筆者は〈わたし〉とは何であったかを確認する。一に、〈わたし〉はサルトルにあって、〈意識〉全体を構成していう、〈意識(即自や対自)〉と〈精神〉の各〈場(部位)〉とともに、その他

としての一〈場〉を占めていた。この〈意識〉全体をあらわす三つの〈場〉はいかなる関係かを質すならば、筆者はひとまず、〈わたし〉や〈精神〉が〈意識（即自）〉に各「付け足しにされた」関係にあろうと指摘しておくが、しかしまさにこうした関係にあるとみえるからこそ、彼の哲学は一見していたように、〈意識（即自や対自）〉を中核とした哲学にすぎなくなることが証明される。一に、〈意識〉全体に与する〈わたし〉は〈他者〉とみなされたし、その〈わたし〉にも哲学（観念）上の、または「現実」の各〈わたし〉があった。さらにサルトル本人をさす〈わたし〉もみられた。この例はこれも疾うに触れた、〈わたしは感覚を弁護するために、また感覚に存在を与えるために〉という引用文中の〈わたし〉にあった。これは「現実」の〈わたし〉に差し換えられても間違いなかろう〈わたし〉である。一に、〈わたし〉は哲学（観念）上のであれ、「現実」のであれ、〈精神〉と同様に、「知る（認識）作用」を有することがない。要は〈わたし〉には〈思惟（認識）（観念）する〉〈能動〉やその〈思惟（認識）（観念）〉〈受動〉なる作用（働き）がない。とどのつまり〈わたし〉は〈理性（知性）〉を持ち合わせない。かつ〈わたし〉は〈意識（即自）〉で〈産出〉され、〈精神〉に伝わり「受容される」〈諸感覚〉諸「感情」（嘔吐や不安）とも、あるいは外的〈世界の諸対象〉から〈精神〉に「受容される」、「現実」の〈諸感覚〉とも関係しない。だから一に、〈わたし〉に関係するのは〈投企〉だけとなる。そこで〈わたし〉すなわち〈投企〉のごとく語られては、両語が何ゆえ等しくみられるか、いかに関係するかをすぐにでも答えなくてはなるまいが、筆者が先きに確認すべきは、〈精神〉が〈意識（即自）〉や外的〈世界〉との各関係では、〈受動〉の〈場〉として配置させられるほかなかったのに比べ、〈わたし〉は〈精神〉との関係に対して、〈能動〉的にかかわる関係を保持するとされることにあり、そこに立つ以外に、上記した問いが明かされないと思えるのだ。つまり〈わたし〉が〈能動〉であるといえるは何度も指摘する通り、〈わたし〉がたえず〈能動〉的働きしかしない〈意識（即自）〉に「付け足しされた」と捉えられるからであり、そのことでは〈わたし〉は〈意識（即自）〉と同じ働きにあると、たとえば〈意識（即自）〉が〈精神〉に対して〈能動〉的に働くがゆえに、〈意識（即自）〉に「付け足しにされた」、哲学（観念）上の、または「現実」の各〈わたし〉も同様に、〈能動〉的働きでなければならぬということである。さすれば筆者はここで自問を余儀無くさせられるであろう。なぜかといえば、すでに〈わたし〉ばかりか、〈精神〉すら〈意識（即自）〉に「付け足しにされた」と記しおいたかぎり、〈精神〉は〈意識（即自）〉と〈受動〉的関係をではなく、〈わたし〉と同じく〈能動〉的関係を有するとみなくてはならなくなるからである。だから筆者が後者を打ち消し、〈精神〉にとって、〈意識（即自）〉とはあくまで〈受動〉的関係でしかないと主張するには、それなりの理由が必要になろう（筆者が前記で「ひとまず」と書き残したはその理由を示すまでの、いわば暫定的措置か表現であり、これについてはのちに語る予定である）。

前段に〈精神〉や〈わたし〉がそれぞれ〈意識（即自）〉に「付け足しにされた」と記しおいたは、例の〈意識（即自）〉から〈精神〉への、また〈精神〉から〈意識（即自）〉への各関係がみられるとした、このいずれにあっても、その一なる関係がかたちづくられることを、要は〈精神〉は〈意識（即自）〉から〈精神〉への関係における〈精神〉のことであり、〈わたし〉は〈精神〉から〈意識（即自）〉への関係で〈精神〉にもっぱらかかわることを示唆させるが、しからば当の〈意識（即自）〉はこれがかかる各関係に対し、いかなる役割を有するからして、その一なる関係（〈精神〉や〈わたし〉がそれぞれ〈意

識（即自）〉に「付け足しにされた」関係）を浮かび上がらせるに役立ったかがここでまとめられる必要がある（なお〈精神〉や〈わたし〉については、おのおのこれまでの、筆者なりの主張に付加（補充）するにとどめおく）。〈意識（即自）〉はこれを含めた、三つの〈場〉から成る〈意識〉全体の中心点もしくは出発点に位置づけられる。〈意識（即自）〉と他の〈場〉との関係にあって、筆者は、〈理性（知性）〉の能力に代表される、哲学（観念）上の〈意識（即自）〉が外的〈世界の諸対象〉とは直接かかわろうとせずに、〈意識（即自）〉自らで見出す諸対象に命名したり、そこから諸〈観念〉を〈産出〉させたりする〈場（部位）〉であるほか、対〈精神〉（の場）との関係では、〈意識（即自）〉で導出される諸〈観念〉を〈精神〉に伝える役割を、また〈精神〉から〈意識（即自）〉への関係では、〈意識（即自）〉は〈わたし〉の仲立ちにより〈意識（対自）〉への〈変化（変身）〉に向かわせる役割を担っているとみた。そして上記した各関係に、とりわけ後者にいう関係に〈わたし〉が登場せざるを得なくなるのは、〈意識（即自）〉の役割をさすよりも、一特徴に相当しようか、哲学（観念）上の〈意識（即自）〉がなるほど、〈意識（即自）〉内での諸〈観念〉の〈産出〉「行動（運動）」をみせては、諸〈観念〉を〈精神〉に伝達するとされるが、しかしそのこと以外で動こうとしないためか、それ以外の「行動（運動）」をまずはこれもまた哲学（観念）上として打ち出す〈わたし〉に委ねさせねばならぬことにあった。そうしたことでは、〈わたし〉も〈意識（即自）〉における、諸〈観念〉の〈産出〉や〈精神〉への、この伝達たる「行動（運動）」すなわち〈能動〉（的働き）のような〈能動〉を可能にしているといわずにおれなくなるわけである。だから哲学（観念）上の、〈精神〉ならびに〈わたし〉がこれも哲学（観念）上の〈意識（即自）〉に「付け足しにされた」と指摘する各関係において、一方の〈精神〉が諸〈観念〉の、いわば受け皿として、つまり諸〈観念〉が「受容される」、〈受動〉の〈場〉として捉えられることは、〈精神〉が〈意識（即自）〉に「付け足しにされた」関係以外に、この関係の〈場〉はどこか、〈わたし〉か（否である）、あるいは〈わたし〉が〈受動〉にかかわるか（否である）すら見定めがたくなることを示唆させるし、他方の〈わたし〉が〈精神〉に伝えられた、哲学（観念）上の諸〈観念〉に、〈意識（即自）〉の働きのように〈能動〉として働きかけ得ることは、〈わたし〉がこの〈意識（即自）〉に「付け足しにされた」関係なしに、〈わたし〉をして〈意識（即自）〉に、さらには〈意識（対自）〉に結ばせる〈統合〉を不可能たらしめることを含意させるのだ。換言すると〈精神〉が〈意識（即自）〉に「付け足しにされ」ていなければ、〈意識（即自）〉で〈産出〉された諸〈観念〉が別段〈精神〉に伝わらなくともよかろうし、〈わたし〉が〈意識（即自）〉に「付け足しにされ」ていなければ、〈意識（即自）〉のような〈能動〉（的働き）にならないどころか、〈精神〉にかかわるとされる外的〈世界〉にさえ接触できないであろうということである。このことは同時に、〈意識（即自）〉に立って語るにしても、〈意識（即自）〉が〈精神〉ならびに〈わたし〉に関係するといわせることになる。まず〈意識（即自）〉が〈精神〉に関係する（これは〈意識（即自）〉から〈精神〉への関係をさす）とみるは、再度いうが、哲学（観念）上の〈意識（即自）〉がそこで〈産出〉させた諸〈観念〉を〈精神〉に伝わらせる必要があるといえるし、外的〈世界〉に関係しないとされた〈意識（即自）〉はその外的〈世界〉を取り込ませんとするうえで、外的〈世界〉からする「現実」の〈諸感覚〉が「受容される」ところの〈精神〉とかかわっていなければならなかったからである（そうでなくば、〈精神〉は何のために、サルトル哲学に

持ち出されるのかであろう)。したがって〈意識（即自)〉は〈精神〉に〈受動〉としてとどまろう、上記した「現実」の〈諸感覚〉によってだけでなく、哲学（観念）上の〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安）によっても代表されはしないのだと付記できるのだ。

そして〈意識（即自)〉が〈わたし〉に関係する（これは〈精神〉から〈意識（即自)〉への関係さす）ことについていえば、後段で明確にする、たとえば諸〈観念〉の一たる〈投企〉こそ〈わたし〉に関係させられざるを得なくなろうと。この〈投企〉の〈観念〉も当然〈精神〉に伝えられる。その伝達がみられたときに注意すべきことがある。〈投企〉がもたらされること自体は、それ以前にすでに〈精神〉に伝えられていた、例の、哲学（観念）上の〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安）が、さらには外的〈世界〉からの、「現実」の〈諸感覚〉が〈意識（即自)〉(の働き）によって「否定（拒否)」されたということを意味させる。換言すると〈意識（即自)〉での〈投企〉の〈観念〉にとって、たとえば、〈意識（即自)〉が〈精神〉における、「現実」の〈諸感覚〉に対して「否定（拒否)」の〈観念〉を打ち出したことは、〈意識（即自)〉が自らに、その直前にもたらされた、かかる「現実」の〈諸感覚〉を「受け入れ」ないことに同意させ、しかも同時にこの「否定（拒否)」の〈観念〉に代えさせられるかして、新たな対処に迫られた〈観念〉を〈思惟(認識)(観念）する〉ことを課せられるからこそ、かの〈観念〉すなわち〈投企〉(〈参加〉〈行動〉や〈選択〉)を案出させ得たと筆者に察知される。しかし〈投企〉はこのとき、〈精神〉にあってさえ、あくまで〈観念〉にとどまり、そのままでは何の役に立つことができない。そこで〈意識(即自)〉は同じ哲学（観念）上の〈わたし〉を〈意識〉全体のなかに占められる〈わたし〉の〈場（部位)〉から引き摺り出し、〈わたし〉に〈投企〉の役割を担わせるべく、〈わたし〉を〈投企〉に立ち合わせ、〈投企〉に関係させることになる（これも後述する通り、〈投企〉はもはや哲学（観念）上のではなく、「現実」の〈投企〉でなければならなくなる)。その際、〈意識〉全体のなかで語られる、〈わたし〉の〈場〉は〈意識（即自)〉の〈場〉に「付け足しにされた」〈場〉のごとくにあったことを、かつそこに立ち得るからこそ、〈意識（即自)〉をして、哲学（観念）上の〈わたし〉や〈わたし〉の〈場〉を「付け足し」的に構想し〈産出〉せしめ、この各〈観念〉を〈精神〉に伝えさせども、その〈精神〉の〈場〉のではない、〈わたし〉の〈場〉の〈わたし〉が新たに、〈精神〉における〈わたし〉をはじめとする諸〈観念〉にかかわっていたことを想起しておく必要があるし、だからかそのかかわりにあって、〈わたし〉の〈場〉の〈わたし〉がこれも哲学（観念）上の〈意識（即自)〉の働きと同様に、〈能動〉として、たとえば〈精神〉に伝えられていた〈投企〉の〈観念〉に働きかけ得ることを諒解せずにおれなくなる。しかし何ゆえ〈意識(即自)〉がでなしに、〈意識（即自)〉に「付け足しにされた」〈わたし〉が〈精神〉にかかわらねばならぬのか。それは、〈わたし〉が「付け足しにされた」ことで、その〈意識（即自)〉の働き（能動）に取って代わることが可能であり、このいわば代行なくして、〈精神〉に関係することが不可能になるからである。こうした〈わたし〉による〈能動〉なくば、〈受動〉の〈場〉と捉えおいた〈精神〉に「受容される」諸〈観念〉は再度〈意識（即自)〉(の場）に関与させられることもなく、〈精神〉にそのままにとどまるか、〈精神〉で消え去るにちがいなかろう（上記に「〈精神〉に伝えられていた」や「〈受動〉の〈場〉」と述べたは〈精神〉側からみた場合に指摘し得る表記である)。だが一方にいう〈意識（即自)〉はなぜ〈精神〉に関係しないといえたのか。〈意識（即自)〉は確かに諸〈観念〉をそこで〈産出〉させ、〈精

神〉に伝えども、〈意識（即自）〉により「伝えられていた」なかでの、例の〈投企〉の〈観念〉に対してさえ再度かかわることができなかったし、まして外的〈世界〉から〈精神〉に「受容される」、「現実」の〈諸感覚〉に対してもかかわることが不可能であったからである。後者に関することでは、すでに〈意識（即自）〉は外的〈世界〉に関係しないと明言し得たばかりか、〈わたしのために、（外的）世界があらわれるようになる〉とはもはや〈意識（即自）〉がではなく、〈わたし〉が外的〈世界〉とかかわっていなければならぬ証左でしかなくなるのだ。このことも〈意識（即自）〉に「付け足しにされた」関係にある〈わたし〉だからこそ可能になる。それゆえさらに問う必要のある〈精神〉の〈投企〉の〈観念〉に〈わたし〉を関連させねば、〈わたし〉の役割が何もなくなるといえるほかに、ここでは〈わたし〉が〈意識（即自）〉に「付け足しにされた」ことなくして、〈意識（即自）〉〈わたし〉と〈精神〉が繋がることはない。しかも〈わたし〉が〈能動〉として働きかけるのではなければ、〈精神〉を介して〈意識（即自にはむろんのこと、対自）〉に繋がることはなかろう、とどのつまりサルトルに主張される〈統合〉は可能にならないと記しおくだけにする。それよりか、以上に語られたことから分かるように、〈意識（即自）〉が自ら〈産出〉した〈投企〉の〈観念〉を〈精神〉に伝える、このそれぞれの働き（能動）を〈意識（即自）〉の役割の一とみなし得ようが、〈意識（即自）〉を例にして語られる、この〈能動〉は哲学（観念）上のことにだけでなく、つまり〈意識（即自）〉内での〈思惟（認識）（観念）〉への〈能動〉的働き（操作）のことにだけでなく、実は彼自身のことをさすのでもよい、「現実」のことにすら当てはめられていわれねばならなくなる。すると〈能動〉には哲学（観念）上の、さらに「現実」の各〈能動〉が含意されていると、これに倣って、〈わたし〉についていえば、〈わたし〉にさえ哲学（観念）上のと「現実」の各〈能動〉がみられると推察し得ても、〈わたし〉なる〈能動〉はしかし、それ自身哲学（観念）上の〈思惟（認識）（観念）する〉〈能動〉的働きとその〈産出〉作用を持ち合わせていないからして、「現実」の〈能動〉の謂を有する以外ないのである。そう理解しないことは、要は〈わたし〉にかかる〈能動〉の役割を与えないことは、彼が自らの哲学に〈わたし〉を何のために持ち出し用いたのか疑問を残すだけとなる。何せ〈わたし〉はすなわち〈意識（即自）〉ではなかったのだから。また序でにいうと〈精神〉さえ〈意識（即自）〉そのものではなかったのだから。こうして三つの〈場〉が繋がる（関係し合う）こと、それで〈意識〉全体（の統合）をかたちづくることは後述して証明せねばならないが、しかしその中心点もしくは出発点にあるのが〈意識（即自）〉に変わりないことを繰返しおく。

ところで〈投企〉の〈観念〉は何を語るかである。まず前段でのかかる〈観念〉を振り返るに、筆者は「〈精神〉に伝えられていた」とされる、あらゆる〈観念〉とはサルトルがときに取り上げた諸「感情」（嘔吐や不安）をはじめとした、あらゆる能力のことであることを、したがってあらゆる能力のなかに、例の〈投企〉も哲学（観念）上の〈観念〉たる能力として〈精神〉に〈存在〉されていることを知った。だがその〈投企〉の〈観念（能力）〉が何ゆえここに質されねばならぬのかは、彼が〈投企〉の〈観念（能力）〉でもって「再度」〈意識（即自）〉に関係させては、〈意識（即自）〉やその〈無化〉に、さらに〈意識（対自）〉やその〈無〉に結びつけさすねらいを有していたからにちがいない。このことはしかし、当の〈投企〉の〈観念（能力）〉が〈意識（即自）〉に関係するのであって、〈精神〉それ自身が直接〈意識（即自）〉にかかわるのでないことを、それだけか、〈投企〉

の〈観念（能力）〉が当初〈意識（即自）〉で〈産出〉されたこと自体は〈意識（即自）〉の〈能動〉的働きによって、〈精神〉に〈存在〉した〈諸感覚〉や諸「感情」（嘔吐や不安）を〈意識（即自）〉に「受け入れ」ない〈観念〉に、要は「否定（拒否）」させる〈観念〉に起因されてあったことを意味させる。ただし〈精神〉に〈存在〉にしよう〈投企〉の〈観念（能力）〉が「〈意識（即自）〉に関係する」と述べたにせよ、かかる〈観念〉は〈受動〉の〈場〉たる〈精神〉の一能力にすぎないからして、この能力が自ら直接的に〈意識（即自）〉に働きかけることは不可能であると受け取らねばならない。そうなると〈意識〉全体の繋がり（関係）をみると指摘した以上、彼にとって、〈投企〉の〈観念（能力）〉を〈精神〉にそのままほったらかしにさせておくわけにはゆかず、その〈意識〉全体のなかの、いかなる〈場〉かにかかわらせることが必要になったと推察され得る。これこそ〈意識（即自）〉でも〈精神〉でもない、〈わたし〉の〈場（部位）〉でなければならなかった。ここでいえるは繰返すが、〈意識（即自）〉が諸〈観念〉を〈産出〉し、〈精神〉に伝えることに、〈精神〉にはその諸〈観念〉が「受容される」ことにあった。だから〈わたし〉が〈投企〉の〈観念（能力）〉にかかわることにより、〈精神〉と〈意識（即自）〉を繋ぐ（結びつける）、仲介者の役割を担うばかりか、〈意識〉全体を語らせることになるわけである。と同時にそこには、〈意識〉全体の一を語る、〈投企〉あるいは〈わたし〉による〈精神〉から〈意識（即自）〉への関係が成り立つとみておかねばならなくなるわけである。さりとて、彼が哲学を構築するにあって、〈投企〉に〈わたし〉が関係するように主張されるならば、その関係はまるで〈投企〉を語るために、〈わたし〉の出番が可能になった順序にしかなかろうと聞こえてきては筆者一人だけの思い過ごしであろうか。つまり〈投企〉の〈観念（能力）〉が〈意識（即自）〉から〈精神〉に伝わり、〈精神〉でのかかる〈観念（能力）〉に〈わたし〉が関係するならば、〈わたし〉はかかる〈観念（能力）〉を成り立たせるうえで、取って付けられたとみえるほかなくなるし、〈わたし〉のこの登場（出番）もなしに、〈投企〉の〈観念（能力）〉は〈精神〉にてどうなるのか、少なからず活用されはしないことに注意すべきなのだ。序でにここで〈投企〉に関した〈わたし〉と〈精神〉について付記しておくべきは、疾うに触れた通り、〈わたし〉が〈投企〉の〈観念（能力）〉を打ち出すのではないこと、また〈精神〉さえ同様にこの〈産出〉作用がないこと、そして〈投企〉（あるいは〈参加〉〈行動〉と〈選択〉）の（諸）〈観念（能力）〉を除き、〈精神〉に〈存在〉するとされる〈諸感覚〉諸「感情」（嘔吐や不安）の諸〈観念（能力）〉とその他の諸〈観念（能力）〉は〈精神〉にとどまろうとしているかぎり、要は〈意識（即自）〉の、いわば声が、または呼び出す（関係しようとする）働きかけがかからないかぎり、〈意識（即自）〉ならびに〈わたし〉に関知することがないということにある。かつ〈投企〉に関しなおも注意せねばならぬは、何より一に、すべて哲学（観念）上のこととして捉えられる、〈意識〉全体に与する一であった〈意識（即自）〉によって、あたかも促されたにちがいなかろう、〈わたし〉の〈場〉の〈わたし〉が、〈精神〉の〈場〉に伝達されていた〈投企〉に「再度」働きかけること（〈投企〉が〈わたし〉に働きかけるのではない）で、〈投企〉は〈わたし〉が働きかけるのと同じ〈能動〉に誘導されなければならなくなり、さすれば一に、この〈わたし〉なる、「働きかける」〈能動〉はもはや哲学（観念）上のことをさすのではなくて、「現実」の〈能動〉でしかなくなることを示唆させるからして、〈投企〉も〈わたし〉なる、「現実」の〈能動〉と同様に、哲学（観念）上のでない、「現実」の〈能動〉すなわち「現実」

に「行動（運動）」し得る、「現実」の〈投企〉の謂でなければならないことにあるのだ。要するに〈わたし〉が〈投企〉の〈観念（能力）〉に「再度」働きかけるとは、〈わたし〉はこの「働きかけ」を〈意識（即自）〉の、哲学（観念）上の働きに任せるのでなしに、〈わたし〉なる、「現実」の〈能動〉に委ねさせねばならぬと、換言すると「再度」とは「現実」にかかわらせて用いられたからして、哲学（観念）上の〈投企〉は、この「再度」（のとき）にあってはすでに哲学（観念）上のではない、「現実」の〈わたし〉に従わずにおれないことを含意させていなければならないということである。

だが何ゆえ「現実」の〈わたし〉が「現実」としての〈投企〉を可能にするといわせ得るのかである。それは「哲学（観念）上の」においてさえ、〈わたし〉は〈投企〉の〈観念（能力）〉を〈産出〉する〈意識（即自）〉に「付け足しにされた」と捉えていたのだから、〈わたし〉は「現実」でも〈意識（即自）〉と同じ〈能動〉の働きを共有し受け継ぐのだ（「現実」の〈わたし〉はだから「哲学（観念）上の」〈わたし〉ではなくなるほか、これに倣って、〈投企〉の〈観念（能力）〉も「現実」の〈能動〉として語らせるかぎり、「現実」の〈投企〉という能力になっている必要がある）し、かかる「現実」のことでは、「現実」の〈投企〉だけは上記したように、「現実」の〈わたし〉と同じ〈能動〉もしくは同じ動態として一体になると答えざるを得なくなるわけである。それに〈投企〉は哲学（観念）上、〈受動〉の〈場〉たる〈精神〉に〈諸感覚〉などと同様に、〈存在〉していたといわれども、また〈わたしが…投企である〉と記されども、この〈精神〉の特徴や役割に、またこの〈観念〉的にしか思えない文章にとどめおかれるならば、サルトルはたんに「哲学（観念）上の」ことだけをもって、〈観念〉的に生きず（存在せず）におれない哲学を提示したと受け取らせ得るが、それでも筆者にとっては、それのみではないと、つまり先きの〈観念〉的文章による〈わたし〉が〈投企である〉ことを「現実」の〈わたし〉すなわち〈投企〉とみなされたのだから、〈わたし〉は〈投企〉に〈わたし〉なる、「現実」の〈能動〉を受け持たせ、この〈投企〉を〈わたし〉に「付け足」すごとくに織り込ませることができるのだ。彼がこうしたことまでをめざすのでなかったならば、筆者は彼の「哲学（観念）上の」主張が何であったかと疑うほかなくなろう。だがこれも否と答えおこう。すると例の〈観念〉的文章には「現実」の〈わたし〉と「現実」の〈投企〉のことも含まれて理解されねばならなくなり、しかもこれらが等しい関係にあるとみることができるにしても、彼が〈意識〉全体の一に取り上げた〈場〉〈精神〉にあっては、この〈投企〉だけが〈精神〉の、いわば話題の中心になって、筆者にすれば、当の〈精神〉自体にそれこそ活躍の〈場〉がみられるかは明かされてはいないといわざるを得なくなる。とまれ筆者がこれまで、あるいはこれ以降も、〈わたし（投企）〉ないしは〈投企（わたし）〉と表記した、あるいは表記するは「現実」の〈わたし〉すなわち〈投企〉をあらわすためであった（「現実」に働きかける〈能動〉が〈わたし〉の役割にすぎないならば、〈投企〉の役割も当然〈能動〉以外になくなるにちがいなかろう）。そう捉えなければ、彼は〈投企〉を、さらには〈わたし〉を何のために打ち立てたかさえ不明になりかねなくなろう。「何のために」かを想起すると、〈わたし（投企）〉が働きかけるにあっては、むろん〈意識（即自）〉に対するためであり、外的〈世界〉に対するためにであった。だから筆者は、〈わたし（投企）〉が〈意識（即自）〉を、外的〈世界〉を各取り込む仲介者になるばかりか、〈わたし〉が実際（現実）の〈投企〉を可能にする実行者の意味に重なっていなければならないとい

ったのだ。この以上に述べたことこそ、筆者が前記していた、「両語が何ゆえ等しくみられるか、いかに関係するか」への答えになる。すなわちいずれ（の問い）にとっても、〈わたし〉と〈投企〉であった「両語」は、〈投企〉に〈わたし〉がかかわる関係を有すると、要は〈受動〉の〈場〉たる〈精神〉での〈受動〉としての〈投企〉はそれ自身が〈能動〉に変わるのではなく（また他との関係から何も影響なくば、〈投企〉は〈精神〉に〈受動〉のまま残存するか、消え去るにちがいなかろうとはすでに触れた通りである）、他との関係である、ここでは「哲学（観念）上の」よりも、「現実」の〈わたし〉なる〈能動〉（働きかけ）の影響を受けて、〈投企〉をして〈能動〉たらしめるということなのである。

以上からはさらなる問いが発せられてこよう。まず一に、「「現実」の」の謂であるとした〈わたし（投企）〉ないしは〈投企（わたし）〉はいかなる関係をいかに仲介せんとするのか。「いかなる関係」とは例の「精神から意識（即自）への関係」をさすにあった。だが一に、何ゆえここに〈意識〉全体の一たる〈精神〉のことが取り上げられねばならぬのか。〈精神〉は何より「哲学（観念）上の」〈わたし〉や〈投企〉によって主に代表させられるし、サルトルにいう〈精神〉にとって、「現実」の外的〈世界〉と〈受動〉的にかかわる〈場〉であった。この〈わたし〉や〈投企〉に、〈意識〉全体の一たる、〈わたし〉の〈場〉の〈わたし〉が〈能動〉として働きかけることができた（〈精神〉のなかの〈わたし〉や〈投企〉は〈わたし〉の〈場〉の〈わたし〉の〈能動〉によって、この〈能動〉に等しく重ね合わせられた）。しかしまた一に、〈精神〉（たる〈場〉）と（〈わたし〉たる〈場〉の）〈わたし〉はいかにして外的〈世界〉に関係せしめられたか。「現実」の〈わたし（投企）〉は〈精神〉に「受容される」「現実」の〈諸感覚〉の出所であった外的〈世界〉と〈受動〉的に関係させられるのでなしに、外的〈世界〉と〈能動〉的に関係していた。そして一に、この「現実」の〈わたし（投企）〉とは何を示唆させるのか。「現実」の〈わたし（投企）〉については疾うに一見した通り、〈身体〉を動かす「行動（運動）」に従うことが伴なわれていた。こうした〈身体〉のことが〈わたし（投企）〉に関係してくるとき、これこそまさに「現実」であるからして、この〈わたし（投企）〉はもはや哲学（観念）上の〈わたし〉〈投企〉や〈身体〉を語ることではなくなるのだ。そこで筆者は今しばらく、上記に掲げられた外的〈世界〉、外的〈世界〉にかかわる〈精神〉（たる〈場〉）や（〈わたし〉たる〈場〉の）〈わたし〉ならびにその〈わたし（投企）〉や〈身体〉のことを主に触れ、ある箇所ではこれらに〈意識（即自や対自）〉を織り込んで総合的に、ある箇所ではそれぞれを個別にまとめおくことにする。彼にとって、〈わたし（投企）〉が〈精神〉（の〈場〉）にかかわらずにおれないことは、〈わたし〉の〈場〉の〈わたし〉が〈精神〉にすでに伝わり〈存在〉していた〈投企〉（の〈観念（能力）〉）に〈能動〉として働きかけ、この〈投企〉を〈わたし〉に取り込んで、〈投企〉の「実行者（実践者）」たらんとする（「実行者（実践者）」の時点（〈身体〉を動かすこと）で「「現実」の」の謂である〈わたし（投企）〉になる）と同時に、かかる〈能動〉なる〈わたし（投企）〉をして〈意識（即自さらに対自）〉に向けさせるだけか、そのうえこれらをして外的〈世界〉と実際接触せしめていることをさすにあった。この外的〈世界〉に関しては、〈精神〉が唯一外的〈世界〉と関係させられる〈場〉に位置づけられていた。それは外的〈世界〉からの、「現実」の〈諸感覚〉が「受容される」のが、この〈精神〉たる〈場〉であったからである。しかして以上に記されたうち、〈わたし〉がこの〈場〉の〈精神〉自体に含まれるあらゆる能力とではなく、そのなかでの〈投

企〉と合体する（一つになる）ことは、「現実」の〈わたし（投企）〉をして外的〈世界〉に〈能動〉的に働きかけさす（〈身体〉を動かせる）ことだけで、〈わたし〉はこの〈わたし（投企）〉を〈意識（即自さらに対自）〉に向かわせ得るばかりか、そのために外的〈世界〉とかかわらせ得ることを語る以外にない。〈意識（即自）〉で〈産出〉される、哲学（観念）上の〈わたし〉や〈投企〉によるのではなく、「現実」の〈わたし（投企）〉によって、〈わたし〉が外的〈世界〉に働きかけるといえるは上記したほかに、彼が〈わたしのために、（外的）世界があらわれるようになる〉と述べたことにもある（ここでいう〈わたし〉は「現実」の〈わたし〉を示すようにさえ捉えられる）。なぜならこの〈わたし（投企）〉に欠かせない〈身体〉を〈能動〉的に動かさずに、〈わたしのために、（外的）世界があらわれ〉はしないからである。彼は〈能動〉的に〈身体〉を動かす〈わたし（投企）〉がそれだけですでに外的〈世界〉に飛び込んでいるごとくにかかわるとみるのであって、〈意識（即自）〉はこの外的〈世界〉と直接関係してはいなかった。つまり〈意識（即自）〉はそれ自らが〈意識（即自）〉内で見出す、もろもろの対象を〈思惟（認識）（観念）する〉こと（能動）ができた（例の〈投企〉という〈観念〉（受動）さえ〈意識（即自）〉の対象として〈産出〉された）が、それでもその〈意識（即自）〉（内）の働きで何らかの〈観念〉を生み出したにせよ、この〈観念〉をどうにかさせないかぎり、要は〈産出〉「行動（運動）」のままに止めおかれるかぎり、〈観念〉は〈意識（即自）〉にとどまらずにおれない（かかる「行動（運動）」に終始する場合、〈観念〉が〈意識（即自）〉に残存したり、そこから消え去ったりすると記したは〈精神〉について触れた際と同様なのである）か、あるいは〈意識（即自）〉が諸〈観念〉を〈精神〉に伝達させる機能にとどまらざるを得なくなるかであり、実際（現実）に〈身体〉を動かし得る「行動（運動）」機能は〈意識（即自）〉にないといえるからして、〈意識（即自）〉が外的〈世界〉に関係（接触）することは不可能になるとみておかなければならない。さらにその〈身体〉のことに関して指摘した、「〈身体〉を動かす」とは、これも〈身体〉内の不断の動きをさすのではなく（〈身体〉は〈身体〉諸器官に異常がみられない以上、これが滅びる（死する）までたえず動き続ける）、しかしその〈身体〉内の動きをも伴なわせながら、〈身体〉は外的〈世界〉（周囲の身近な世界、たとえば精神的肉体的労働が課せられている社会）に溶け込むべく動く（「行動（運動）」する）ことを含意させる。

したがって外的〈世界〉はその〈諸感覚〉が〈精神〉に「受容される」からなのか、〈精神〉に関係させられるだけでなく、〈意識（即自）〉から〈精神〉に伝えられた、一〈観念（能力）〉〈投企〉が、〈身体〉を動かしては、外的〈世界〉と関係せずにいない、「現実」の〈わたし〉の〈能動〉的働きによって、まずは〈精神〉から取り出され、そして続いて〈投企〉と〈わたし〉を合体させては、〈意識（即自）〉に働きかけるおかげなのか、当の外的〈世界〉それ自身をばかりでなしに、〈わたし（投企）〉をも〈意識（即自）〉に関与させてから〈意識（対自）〉にまで結びつかせることを示唆させるといわねばならなくなる。なぜならここに、例の〈この対自とこの世界〉が想起され、当てはめられる必要があるからである。かかる語句にあって、〈この対自〉はすでに一見した、〈意識〉と〈わたし〉で構成される〈人間存在〉がめざす、その〈意識〉を、それも当然「現実」の〈意識〉をさすはともかくも、〈人間存在〉でいう〈わたし〉の方はそれこそ〈この世界〉に与され、しかも〈身体〉とかかわる、「現実」の〈わたし〉としてあらわされなければならないだ

けか、筆者は〈この世界〉にさらに外的〈世界〉のことが含まれ捉えられていなければならぬとみていた。そうでなくば、サルトルにいう〈統合〉が成ることはなかったであろう。だから、今はこの〈統合〉について語らずとも、「現実」の〈わたし（投企）〉にかぎらせていうならば、この「現実」の〈わたし（投企）〉も、哲学（観念）上の〈わたし（投企）〉のことと同様、〈精神〉のなかから〈投企〉（あるいはかの〈参加〉〈行動〉と〈選択〉）を取り出すことでは〈精神〉を介して、〈意識（即自）〉に繋がる（それは〈意識（即自）〉を〈意識（対自）〉にするためであった）必要があろうわけなのである。そこに筆者にいう「〈精神〉から〈意識（即自）〉への関係」が生じ、かかる関係なしに、〈意識（即自）〉は〈意識（対自）〉に〈変化（変身）〉できようもなくなる。

以上が〈わたし（投企）〉はいかなる関係をいかに仲介せんとするのか」に対する、筆者なりにみた、その答えである。すなわち、〈意識（即自）〉から〈精神〉に伝えられた〈投企〉（の〈観念（能力）〉）に対して、〈わたし〉（なる〈観念〉）が合体するように働きかけ、次いで〈身体〉の「行動（運動）」を伴わせることは、もはや哲学（観念）上のではない、「現実」の〈わたし〉たることを意味させるだけか、この〈わたし〉をして〈意識（対自）〉をめがけさせることであり、そのためには〈意識（即自）〉に関係させざるを得なくなると。さりながらサルトルに、〈わたし（投企）〉をして〈意識（即自）〉への仲介を試みさせたは、その〈意識（即自）〉をどうせよといわせることであったのか。それはここに繰返してでもいわねばならぬが、筆者にとって、〈わたし（投企）〉が外的〈世界〉に〈わたし〉を〈能動〉的に「投げ企てる」〈投企〉の、「現実」の「行動（運動）」を通して、当の〈わたし〉をはむろんのこと、同時に〈意識（即自）〉をも〈無化〉にさせ得ることにあったし、このことでしか、彼にいう〈統合〉に向けて、〈わたし〉までを「本来的存在」に、かつ〈意識（即自）〉を〈意識（対自）〉に〈変化（変身）〉させないだけか、〈わたし〉の（「本来的存在」たる）〈無〉すなわち〈自由〉の、かつ〈意識（対自）〉の〈無〉すなわち〈自由〉の現出に繋げ（関係）させないと読むほかないことにあった。こう捉えられるは、〈わたし〉が〈意識（即自ばかりか対自）〉に（各）「付け足しにされた」と筆者に記させることにより、〈わたし〉の出番が可能になった（各を括弧に付したのは〈即自〉か〈対自〉になる〈意識〉に応じた表記であり、〈意識〉はもともと一でしかない）ことにある。その〈わたし〉という表現は、たとえば〈意識（対自 le Pour-soi）〉が再帰代名詞〈se〉を〈自ら（に）（を）〉や〈自己（に）（を）〉と、あるいはその所有形容詞〈son（sa）〉を〈自ら（自己）（の）〉と訳されたのと同様に、彼がここで哲学（観念）上のサルトル本人（「現実」の）をさすかはともかくも、ときに主語人称代名詞〈je〉や所有形容詞〈mon（ma）〉を使用したところによって成るし、また〈意識〉すなわち〈わたし〉とみるのではないからして、〈意識（脳）〉全体のなかの〈わたし〉の〈場〉における〈わたし〉がなければならぬと付加させ得る。そして彼が〈意識〉全体の関係を語る際、その〈意識〉の関係と例の〈対自と即自との関係〉にあるとされるとともに、筆者はこの〈対自と即自との関係〉の一を、「〈意識（即自）〉から〈精神〉への関係」と、〈わたし（投企）〉の仲立ちで、「〈精神〉から〈意識（即自）〉（さらには〈意識（対自）〉）への関係」を含ませることにあったと指摘しておかねばならなくなる。だからこの〈意識〉全体は、とどのつまり〈意識〉と〈わたし〉で〈構成される〉とした〈人間存在〉は上記した順をして、〈意識〉を〈対自〉に、その〈無〉にせしめてから、再び〈意識（即自）〉に立ち戻らせる関係を繰返しつつ生き続けなけれ

ばならないことが課されくる。しかも〈意識〉全体をあらわす、こうした〈意識（即自や対自）〉〈精神〉〈わたし〉にあって、彼による、かかる「使い分け」は、彼の持ち味（特徴）に帰すといえるやも知れぬが、しかしそのうち、まず〈意識（即自）〉や〈精神〉などにはいかなる「使い分け」に従った役割にあるのかが問われることになる。

〔続〕

註

(1) これは前号「ヴェーユと実存主義者たち⑥」（新潟大学大学院現代社会文化研究科、「欧米の言語・社会・文化」研究紀要、第17号、2011年３月）に続く拙論である。

(2) Jean-Paul SARTRE《 L'être et néant 》(Gallimard) P.37〈Descartes s'est trouvé en face d'un problème analogue lorsqu'il dut s'occuper des relations de l'âme avec le corps. Il conseillait alors d'en chercher la solution sur le terrain de fait où s'opérait l'union de la substance pensante avec la substance étendue, c'est-à-dire dans l'imagination.（デカルトは魂（精神）と身体との関係に取り組まねばならなかったとき、それに類似した問題にぶつかった。彼はそのとき思惟する実体と延長（拡がり）の実体との合一が起こる事実的領域に、すなわち想像に、その解決を探す方がよいと指導した。）〉

(3) Ibid.,P.361

(4) Ibid.,P.270

(5) Ibid.,P.271

(6) Ibid.,P.270